ISSN 0386−6009

サイコアナリティカル
英　文　学　論　叢
—英語・英米文学の精神分析学的研究—

第 35 号

The Journal of Psychoanalytical Study of English Language and Literature

No. 35

サイコアナリティカル英文学会

The Society for Psychoanalytical Study
of English Language and Literature

目　　次

1．T. S. Eliot: ‘Wisdom of Humility’
——人間の基本的理念として—— ……1
倉橋　淑子

2．*The Joy Luck Club* をユング派の分析心理学で読み解く
——エーリッヒ・ノイマンの女性心理発達史を参照して—— ……19
森岡　　稔

3．Jane Austen の作品にみられる登場人物の体調不良について ……45
湯谷　和女

4．『クブラ・カーン』再考 ……61
木村　保司

5．独創的な二度ものかたり：
マップル神父の説教と「ヨナ書」について ……79
横田　和憲

6．SYNOPSIS ……93

7．執筆者紹介 ……99

8．サイコアナリティカル英文学会会則 ……100

9．『サイコアナリティカル英文学論叢』投稿規定 ……104

10．サイコアナリティカル英文学会の図書出版に関する規定 ……106

11．編集後記 ……107
小園　敏幸

SYNOPSIS

1. T. S. Eliot: 'Wisdom of Humility' ····· 93
Toshiko Kurahashi

2. Reading *Joy Luck Club* through Jungian Depth Psychology
— In the Light of Psychological Stages of Woman's Development by Erich Neumann — ····· 94
Minoru Morioka

3. Another Theme of Jane Austen: Human Health ····· 96
Kazume Yutani

4. Reading *Kubla Khan*
— in Terms of Psychoanalytical Study — ····· 97
Yasushi Kimura

5. Creatively Twice-Told Narratives:
On the Sermon of Father Mapple Based on *Jonah* ····· 98
Kazunori Yokota

T. S. Eliot: ‘Wisdom of Humility’
―人間の基本的理念として―

倉　橋　淑　子

エリオットは、最後の詩作品『四つの四重奏』で用いた ‘Wisdom of Humility’ という言葉にどのような意味をもたせようとしたのだろうか。フロイト（Sigmund Freud）に俟つまでもなく、彼の生育史がこの言葉の意味の解明に大きな助けとなるだろう。従って先づ、彼の life-history の点検及び分析を起点としてエリオットのこの言葉の真意を考察していくこととする。尚、Chronology は本論稿のテーマの解明に特に関係の深い事項を中心として作成した。

Ⅰ　生育史

1 Chronology[1]

西暦	Eliot	その他
1669		祖先の Andrew、サマセット州イースト・コウカーからマサチューセッツ州に移住
1831		祖父の Greenleaf、ミズーリ州セント・ルイスに定住
1888	セント・ルイスに生まれる	父 Henry47 才 母 Charlotte45 才
1906-10	ハーヴァード大学	
1910-11	ソルボンヌ大学 若いフランス人学生、Verdenal と友人になる	
1911-14	ハーヴァード大学	

1914	マールブルク大学 オックスフォード大学	第一次世界大戦始まる
1915	Vivien と結婚	Verdenal 戦死
1917	ロイド銀行に勤務 結婚後、父親から援助打ち切られ、経済的に逼迫 *Prufrock and Other Observations* 出版	Vivien は Eliot と同じ 1888 年生まれ 神経症病む
1918		第一次世界大戦終わる
1919		父 Henry 死去
1920	神経症発症　Vivien とマーゲイト（保養地）へ	
1921	ローザンヌで静養 『荒地』執筆進む	
1922	『荒地』出版	
1927	英国に帰化 ユニテリアンからアングロ・カソリックに改宗	
1930	「聖灰水曜日」出版	母 Charlotte 死去
1932	Vivien と離婚	
1935-40	『四つの四重奏』楽章毎に出版 完成版として出版	
1941		第二次世界大戦始まる
1945		同上大戦終わる
1947	ハーヴァード大学より Honorary degree 受章	
1948	Order of Merit 受章 Nobel Prize for Literature 受章	Vivien 死去 Eliot 葬儀に参列
1954	Goethe Prize 受章	
1957	Valerie と結婚	Valerie Fletcher（秘書）
1962-65	病状悪化	
1965	ロンドンで死去	
1967	‘Memorial stone’ がウエストミンスター寺院に設置される	

２　Chronology から読む思想形成過程

（１）系譜・環境

エリオットは伝統ある知的階級の一員として生まれ、当然ながら何不自由なく家族は、とりわけ母は彼の才能に早くから気付き、彼の教育に熱心であった。彼女も後に *Savonarola* を出版するなど才気煥発な女性であった。その母子関係は極めて密着したものであった。父は実業家として成功したが、ヘンリーの父（エリオットの祖父）にならって慈善事業にも熱心にとりくんでいた。ユニテリアン派の牧師であるグリーンリーフは、エリオットに精神面で大きな影響を与えた。例えば学問に対する熱心さ、伝統を重んずる姿勢、きわめてストイックな考え方なども、祖父から受け継いだものだった。

母親とエリオットとの関係についていえば、「母子同一化現象」ともいえるもので、それは「同性愛的傾向」をもつものである、とフロイトは説明する。一方アドラー（Alfred Adler）は、フロイトのこの理論は例外的な子供においてのみ現われるものであるとして次のようにのべている。「エディプス・コンプレックスとは常に訓練の人工的産物なのである。われわれは遺伝的に近親相姦的本能などを規定したり、あるいは、実にそのような精神異常が、その起源に何か性的なものに関連があるなどと想像する必要はないのである。」[2] ここでフロイトとアドラーの理論をエリオットの場合で考えてみると、エリオットがソルボンヌ大学でフランス人男性と特に親しい関係であったと言われているが、それはフロイトの説の通り、母親のエリオットに対する愛情・愛着の過多によるのではないか、と考えられる。一方フロイトの言うエディプス・コンプレックスについて、エリオットの場合でいえば、彼は母親に対して強い愛着をもっていたが、父親に対しては、距離感をもってはいたものの、はっきりとした憎しみ或は否定の感情をもっていたわけではなく、又文学活動を通して多くの友人、知人と良い関係を築いてもいた。従って「母子同一化」、エディプス・コンプ

レックスということでは、エリオットの場合にはあてはまらないといえよう。

彼の系譜・環境が厳密な自己分析、神経の繊細さ、徹底したストイシズムという後年の性格形成及び伝統の重視、歴史認識という思考傾向のルーツであったことは事実である。

（2）勉学・研究

ハーヴァード大学入学から約 10 年間、エリオットは広範囲に亘る勉学・研究に専念した。大学の所在地はアメリカ（ボストン）、フランス（パリ）、ドイツ、イギリス（オックスフォード）であった。エリオットが学問の地として選んだ場所は伝統ある知的拠点としての大学であった。アメリカでの移動は、ほぼニューイングランドに限られた。エリオットは「伝統と個人の才能」（“Tradition and the Individual Talent”）で次のようにのべている。

> No poet, no artist of any art, has his complete meaning alone. His significance, his appreciation is the appreciation of his relation to the dead poets and artists. You cannot value him alone; you must set him, for contrast and comparison, among the dead.[3]

エリオットのこのような「伝統に対する姿勢」は当然ながら 1669 年アンドリュー・エリオットがマサチューセッツ州に居を移していることからもうかがえる。

エリオットが 10 年間にも亘って幅広い学問に没頭した背景には、所謂上流階級の経済的・社会的地位の関係も当然ながら、祖父グリーンリーフが牧師であり、又ワシントン大学の創設者であったこと、更に慈善事業にも熱心にとりくんだことなど、エリオットに与えた影響は、はかり知れない。外で遊ぶよりは多くの本を読むことを優先する日常習慣がエリオット自身の性向の一部を形づくり、それは或意味では余りにストイックな生き

方を無意識のうちに自分自身に強いることにもなったことは否めない。

フロイトは、抑圧から文化的衝動へという変化を「昇華」と言っているが、それは、作品を書き続ける、という意味では昇華であったが、同時に「神経症」発症の原因の 1 つでもあった。エリオットの超自我の肥大化との関連でスペンダーは次のようにのべている。

> In his *Notes on Some Figures behind T. S. Eliot*, to which I am here much indebted, Herbert Howarth records that William Greenleaf ‘constantly and passionately thought how “It is to the holy throng of apostles and martyrs, God’s saints on earth, that all progress in wisdom and goodness and all triumphs over evil, are due. . .” ’[4]

又、同書でスペンダーは次のようにものべて遺伝的素質にもふれている。

> As a child, Eliot must have had the virtue of this grandfather drummed into him.[5]

（３）結婚・離婚・再婚

1915 年 5 月、ソルボンヌ大学留学中に親しくなったかけがえのない友人、ヴェルデナル戦死の知らせがあった。同年彼はヴィヴィアンと結婚した。この hasty marriage は何を意味したのか。*The Letters of T. S. Eliot* に「結婚の記録」が掲載されている。同書によれば、立会人はヴィヴィアンの友人と叔母、夫婦の年齢はともに 26 才、エリオットについては ‘TSE is recorded as of no occupation’ [6] とある。又、1915 年 7 月 2 日付の手紙では、ヴィヴィアンと結婚したこと、そして両親に是非ボストンかニューヨークに来て欲しい、と書き送っている。[7] そして更に同年 9 月 10 日付の父宛の手紙では次のように訴えている。

> You will see that until January we shall be in urgent need of funds, and that we shall need some money very soon. We have planned a very economical mode of life, and Vivien's resourcefulness and forethought are inexhaustible. We are not planning that to make living easier: the question is how to live at all.[8]

エリオットの母親は事後に知らされたこの結婚に大反対だった。事実、1919 年に病死した父ヘンリーは、次のような遺書を残している。

> Eliot's father made arrangements that any property left to Eliot in the event of his death would revert to the family trust and not go to Vivien Eliot.[9]

生活費・医療費等捻出のため、エリオットは心ならずも bank clerk、学校の非常勤講師などで生活を支え、詩作に費やす時間も殆どなく、彼も又神経の病を病むようになった。医者の強い勧めで夫婦共にイギリスのマーゲイトへ、その後単身でスイスのローザンヌで療養生活を送った。夫婦関係は破局を迎え、1932 年に離婚した。妻に対する罪悪感、家族・伝統に対する罪悪感と喪失感から立ち直るには「時」が必要だった。ヴィヴィアンは 1948 年に死去、エリオットは葬儀に参列したという。

1957 年、エリオットは 8 年間に亘って秘書として仕事をしていたヴァレリーと結婚した。エリオット 68 才、ヴァレリー 30 才であった。1965 年にエリオットが死去するまで彼女と過ごした日々はエリオットにとって、人生で初めての心静かな、平穏な日々であった。詩作等心の赴くままに文学活動もこなしながら、ヴァレリーと度々旅行もしていた。彼にとって至福の生活は、母のようなヴァレリーという心の支えがあってのことだった。エリオットは、生涯女性を愛するというよりは、女性の献身的な愛

に包まれていることで心の平安を保ち続けられたのだろう。

Ⅱ　思想の変遷

エリオットの生涯を通しての思想の変遷を 3 期にわけ、各時期の代表的作品の分析を通して考察する。

１　第 1 期「J・アルフレッド・プルーフロックの恋歌」（“The Love Story of J. Alfred Prufrock”）

「プルーフロック」の草稿を書き始めたのは、1910-12 年、ソルボンヌ大学で Academic year をすごしていた頃である。1917 年に出版された、この作品の舞台は黄昏のロンドン。smoky な雰囲気の中のアンニュイ、空疎な人間模様、男女の不毛な関係、そして主人公はせめておしゃれをして若く見せたい頭の薄くなった男の物語である。最後は救いの象徴である筈の「水」に溺れる。この時期、エリオットは女性を主人公にして、テーマは全く同じ「或る婦人の肖像」（“Portrait of a Lady”）を発表している。2 作とも 1 個人の閉ざされた心の世界である。エリオットはフランス語は勿論多くの言語を学び、そして哲学・宗教等にも学問の幅を広げていった。ただ第一次世界大戦中のヨーロッパ文明の頽廃と陰うつはエリオットの不安・焦燥と呼応していた。

後に「プルーフロック」にはソルボンヌ大学時代の親友ヴェルデナルへの献辞が記された。

２　第 2 期『荒地』（*The Waste Land*）

1921 年頃、この詩を書き始めたと思われるが、この頃から彼の心の状態は悪化し、医者の ‘needs three months’ complete rest as soon as possible’ [10] という勧めで保養地で過ごしたが、単身で行ったスイス･ローザンヌでは、神経症の快復が見られ、又『荒地』の完成に大きな進展があった。

本作品については『サイコアナリティカル英文学論叢　第 30 号』「T. S. Eliot: Chaos から祈りの地へ」で精神分析学の視点から考察している。[11]

『荒地』は 5 つの章から成る。第 1 章は「死者の埋葬」で、非常に衝撃的な‘April is the cruelest month.’で始まり、読者の心をつかむ。本作品の底に一貫して流れる「輪廻転生」という考え方の示唆である。ここは依然として「プルーフロックの不毛の世界」である。次の印象的な詩行はこの雰囲気を十二分に伝えている。

A crowd flowed over London Bridge so many,
I had not thought death had undone so many.
Sighs, short and infrequent, were exhaled,
And each man fixed his eyes before his feet.

最後の‘You! Hypocrite lecteur!—mon semblable—mon frère!’は、われわれ読者へのよびかけである。われわれも共犯者であり、生きている者は、死んでいる者なのだという逆説的な問いかけでもある。

第 2 章は「チェス遊び」である。安っぽい派手な客間ですごす女たちの不毛な会話である。‘What are you thinking of? What thinking? What?’にしても‘Are you alive, or not? Is there nothing in your head?’にしても、そして結局は‘What shall we do tomorrow?’というその場限りの生き方しかできない人間の現実が描かれている。

第 3 章は「火の説教」で前半の思想を象徴的に表現するものとして、

The typist home at tea time, cleans her breakfast, lights
Her stove, and lays out food in tins.
Out of the window perilously spread
Her drying combinations touched by the sun’s last rays,
On the divan are piled (at night her bed)
Stockings, slippers, camisoles, and stays.

をあげることができる。自堕落な日常はこのタイピストに代表される当時の人々の現実である、とエリオットは思う。第一次世界大戦の精神的・物理的疲弊は未だにヨーロッパを覆っていたのではないか。又エリオットがかつて療養し、『荒地』を構想した地名「マーゲイト」が詩の中にくみこまれているのも象徴的である。最後の‘burning’その独立した1行にエリオットがかけた思いは何だったのだろうか。

第4章は「水死」で非常に短い章だてであるが次章への移行として重要な役割をもっている。‘He passed the stages of his age and youth / Entering the whirlpool.’は第1章の「死と再生」を思わせ、又最終行‘Consider Phlebas, who was once handsome and tall as you.’は、プルーフロックの世界を回想させる。肉体の老化・衰退は、生きているすべての人間にとって残酷な現実である。それは肉体のみならず精神にとっても同じであるが、必ずしも肉体の年齢に呼応するものではない。現実の直視、現実への深い洞察、新しい地平がそこから開ける予感がある。

最終章は一言で言えば「救いの予感」未だ荒地に雨は降らないが雷鳴が響く。又、見える人にしか見えない‘another one’は復活のキリストの暗示である。稲光がし、やがて雷鳴は、「与えよ」「共感せよ」「自制せよ」という言葉の擬音のように聞こえる。最後は自己放棄、そのあとにくるのは‘Shantih’という祈りの言葉のくり返しで、『荒地」（「荒地」）は終わる。「荒地」の自覚こそ最大の救いの予言である。この作品でエリオットの眼は「個人」から「社会」へそして「文明」へと視点の広がりを見せている。

3　第3期『四つの四重奏』（*Four Quartets*）

『四つの四重奏』に先立って1930年に出版された「聖灰水曜日」（“Ash Wednesday”）は、まさに‘religious poetry’であり『荒地』の世界とは一線を画しているといえよう。長い間の波乱の中の懊悩をのりこえて過去と

訣別し新しい精神世界で生きようとする凛然とした姿勢を感ずる。‘alone with God’という言葉は強固な意志の確認である。本作品は次に続くエリオットの最後の詩作品、『四つの四重奏』の出現を予感させる。

『四つの四重奏』は、1943 年にアメリカで、1944 年にイギリスで出版された。本作品は 4 つの楽曲からなる。第 1 楽曲の地はイギリスのグロースターにある古い荘園であり、それは 1934 年に彼が訪れた時には無論廃園となっていたが、彼は歴史の中に自分を見る。鳥が啼き、たわむれる子供たちが声を弾ませる。エリオットはこの中に時を超えた vision を見る。冒頭は

> Time present and time past
> Are both perhaps present in time future,
> And time future contained in time past.
> If all time is eternally present
> All time is unredeemable.

であり、テーマは「時」であり、「時」についての哲学的思考が展開される。きわめて重層的な展開であり、特に‘juxtaposition’の手法を駆使することによってその抽象的概念は映像といえる程に鮮明であるが、同時に、その「時」の中に身をさらす人間の生々しさ、そして存在の仮借ない脆弱さをも浮き彫りにする。昔日の庭園に溢れた希望――小鳥たちの囀りや子供たちの笑い声――が甦る。われわれは、徹底した‘darkness’の住人ではない。

第 2 楽曲の題名「イースト・コウカー」は、エリオット家の祖先が 1669 年にここからアメリカに移住した地である。いわば、ここは、エリオット家にとってルーツともいえる土地であり、アメリカへの移住以前のエリオット家の歴史が根付いていた町（村）でもある。従って「イースト・コウカー」は第 1 楽曲同様、「時」をテーマとしているが、そこに更に歴

史的・哲学的視点が加わっている。「人間」は勿論、「物」も変容しながらも生きて死ぬ、死んだ者（物）は形をかえて再び生きる、‘beginning’ と ‘end’ のかかわりの思索である。そのような状態の中での

The only wisdom we can hope to acquire
Is the wisdom of humility; humility is endless.

（下線は筆者、論文表題）

という詩行は、真に魂の願いであろう。われわれの魂に訴える敬虔な祈りである。

第 3 楽曲「ドライ・サルヴェイジェス」はマサチューセッツ州アン岬の岩礁群のあたりでエリオットがハーヴァード時代に夏訪れた場所だといわれている。その意味では第 1 楽曲の「荘園」と同じ思い出の場所であり、歴史の 1 コマである。第 1・2 楽曲の場の設定が「土地」であるのに対し、ここでは設定は「海」である。精神分析でいえば「海－海水」は「救いの象徴」である点を考慮すると、第 3 曲は「魂の救済」の暗示と考えられる。次の詩行は、死んで他の人のいのちとして再生する、謙虚な再生への祈りといえよう。

At the moment which is not of action or inaction
You can receive this: “on whatever sphere of being
The mind of a man may be intent
At the time of death”—that is the one action
(And the time of death is every moment)
Which shall fructify in the lives of others:
And do not think of the fruit of action,
Fare forward.

エリオットの「時に対する思索」、「輪廻転生」――「再生」の根底には、『荒地』冒頭の「四月は最も残酷な月」にしても、常に‘benevolence’に通ずる想念があるといえよう。

第4楽曲「リトル・ギディング」はイギリスの有名な史跡であり、歴史的にも「祈りの地」として知られる。この詩全体を覆う雰囲気はきわめて宗教的であり、静謐の世界である。詩人としての最後の詩、『四つの四重奏』において‘Every poem an epitaph.’という1行の中にエリオット自身の生涯を捧げた重みを読みとることができる。まさにエリオットが言うように「詩は感じるものだ。」という言葉に納得する。一つひとつの言葉には歴史があり、その歴史をふまえてはじめて「言葉」の本当の意味を理解することができる、ということである。「リトル・ギディング」の中にある次の一節、そしてこの詩行の中にある‘secluded chapel’こそ、数々の栄誉に輝いたエリオットが求めた簡素極まる祈りの場であったに違いない。

A people without history
Is not redeemed from time for history is a pattern
Of timeless moments. So, while the light fails
On a winter’s afternoon, in a secluded chapel
History is now and England.

尚、『四つの四重奏』については『サイコアナリティカル英文学論叢』第15号「受容への道」及び『論叢』第30号「T. S. Eliot: Chaosから祈りの地へ」で精神分析学的視点からの言及がある。[12]

Ⅲ　Wisdom of Humility

Ⅰ、Ⅱにおいて夫々エリオットの生育環境を中心に彼の歴史と人格形成

の所以を、続いて作品を通しての思想の変遷を、Ⅰに基づいて考察した。Ⅲにおいては、１．エリオットにとって‘Wisdom of Humility’とは何か、２．エリオットの提示する‘Wisdom of Humility’は､エリオットという「個人」を超えた人類共通の基本理念ではないか、について考察する。その第一歩として、ここでは、新渡戸稲造『武士道』、孔子『論語』、西田幾多郎『善の研究』をとり上げて検証する。

１．エリオットにおける‘Wisdom of Humility’

最初に wisdom、humility 夫々の意味を辞書で確認する。『スコットフォーズマン英和辞典』（角川書店、1992）によれば、‘wisdom’は、１．（体験による知識・洞察力に基づく知恵。英知、賢いこと、賢明さ　２．賢い行い、格言　３．学識、知識（knowledge）とあり、‘humility’については謙遜、謙虚、卑下とある。先づ wisdom の訳語として辞書に示された語の中からは「英知」を選ぶのが適切と思われるが､「言葉」と「コトバ」が違うように､更に言えば‘word’と‘Word’が異なるように､漢字は「叡智」としたい。「叡智」には知性と哲学が感じられる。‘humility’については､『四つの四重奏』の最終行

All manner of thing shall be well
When the tongues of flame are in-folded
Into the crowned knot of fire
And the fire and the rose are one.

に託したエリオットの心情を思えば「謙虚」が一番彼の意を体しているといえよう。

『四つの四重奏』の後発表された詩劇 *The Cocktail Party* において主要人物の一人シーリアが看護婦として人々の救済に当たって死亡したその死も彼女が望んで従事した仕事の任務を全うした故の死である、と説明するエ

リオットの考え方の中には、きわめて敬虔な信者の心のかたちを読みとることができる。その点も考慮に入れれば、より高い徳を内包する「謙譲」を選ぶのが適切であると思われる。従って、‘wisdom of humility’ の翻訳語として「謙譲の徳（叡智）」とする。

エリオットは 1947 年、マサチューセッツ州の Concord Academy での講演で ‘For a poet, humility is the most essential virtue’ とのべている。[13]

２．共通理念としての ‘Wisdom of Humility’ ―東洋の思想家の場合―

（１）*Bushido, The Soul of Japan*　　Inazo Nitobe

1899 年、アメリカで出版された新渡戸稲造による *Bushido* は 100 年以上を経た今日まで不変の価値を持って受け継がれて来た。『武士道』とは副題にもある通り、「日本人の魂」についてのべたものであり、「武士」に限らず国籍、身分、貧富等に関係なく、人間が求めるべき基本理念――最高の徳についての新渡戸の信念の表明である。彼は同書の中で ‘Benevolence, the feeling of distress, love, magnanimity, affection for others, sympathy and pity were ever recognized to be supreme virtues, the highest of all the attributes of the human soul.’[14] とのべており、これを矢内原忠雄は「仁･惻隠の心、愛、寛容、愛情、同情、憐憫は古来最高の徳として、すなわち人の霊魂の属性中最も高きものとして認められた。」[15] と訳している（下線筆者）。矢内原は、‘benevolence,’ ‘feeling of distress’ を単なる訳語ではなく「言葉の心」を翻訳したといえるだろう。新渡戸は「仁」については、古来最高の徳とし、孔孟の教えも引用し、キリスト教も仏教もその違いをこえて人類共通の基本概念と説いている。『武士道』の書かれた時代を思えば、歴史の重さははかり知れないが、人類として 1 つの理想をめざすという考え方は、まさに慧眼である。

ここでエリオットの ‘Wisdom of Humility’ に立ち返って考えてみれば、‘Virtue of Benevolence’ は、ほぼ同じ「人間の心の共通理念」といえるのではいか。それはエリオットの詩劇 *The Cocktail Party* における「崇高な死」

は「死んで生きること」であったように、矢内原の翻訳語「仁」という徳は ‘Benevolence’ であり、それはつまり ‘Humility’ に対する究極の解答である、といえよう。

（２）『論語』孔子

『武士道』の執筆に当たって新渡戸は、『論語』にその源流を求めた、という。今から 2500 年位前に記録された孔子とその弟子たちの問答の中に、われわれは今日に生きる理念を見出すことができる。

孔子が「徳」の主たるものとしたのは、恕･信･義･謙虚･礼である。「恕」は「仁」とほぼ同義に用いられている。孔子がこれらの徳の中で最も根本的な徳としたのは「仁」であり、たしかに「仁」についての言及は『論語』の中に多く見られる。以下に例をあげて孔子のいう「仁」について‘Humility’の理念と比較しながら考察する。弟子の子貢が一言で人が終身行うべきことは何か、と尋ねた時、孔子は「其れ恕か。己の欲せざる所人に施す勿れ。」[16] と答えている。これは、新渡戸の ‘benevolence’ でありエリオットの ‘humility’ と共通する理念であろう。又「人にして不仁ならば礼をいかん。人にして不仁ならば楽をいかん。」[17] とのべて仁の心がなければどんなに表面的に相手に礼をつくしても人の心に訴えないし、どんな楽も同様である、として基本は心の徳であると言っている。更に例をあげれば「仁に里るを美となす。択んで仁に処らずんば、焉んぞ知とするを得ん。」[18] とは仁の心をもった人たちが住むような町を択んで住まなければ知者とは言えないということで、人間の心を見分ける智の必要を説いている。『論語』は人間がさまざまな心の道程をへて仁という徳の世界に至るための指針といえる。それは、エリオットが歩んだ道と重なり、彼が到達した ‘Wisdom of Humility’ の世界と共通するものであろう。

（３）『善の研究』西田幾多郎

『善の研究』は、1911 年（明治 44 年）に出版され、今日まで読み継がれている。西田はこの書物において、「人生とは何か」を哲学及び宗教の立場から考察している。彼は「善とは、自己の内面の要求、意識の統一力である人格の要求を実現することにほかならない。」[19] と規定する。この「人格の要求」は彼によれば極めて厳粛なものであって、いわばフロイトにおける「超自我」、エリオットにおけるストイックな自己規制（self control）とも共通するものがある。つまり「善」とは厳正な「道徳的法則」である。「自己の知力を尽し情を尽した上において始めて真の人格的要求即ち至誠が現われてくるものである。自己の全力を尽しきり、ほとんど自己の意識がなくなり自己が自己を意識せざる所に、始めて真の人格の活動を見るのである。」[20] 西田は「宗教は哲学の終結である。」と言っているが、エリオットも哲学的思考から「聖灰水曜日」で或は『四つの四重奏』で示しているように ‘self-renunciation’ の境地をへて神への祈りという「宗教」の世界に思いを託したことと共通の感覚であろう。この極限の「至誠」という徳は、‘Humility’ と同一次元でとらえることの出来る「徳」である。

ここまで ‘Wisdom of Humility’ について１．エリオットの場合と、２．東洋の徳としての「仁」との共通項を求めるために 3 人の思想家を例にあげて考察した。即ち、新渡戸稲造、孔子、西田幾多郎である。各国の歴史、地理的環境等による国民性の違いはあるとしても、リーヴィの次の言葉はそれぞれの諸条件をこえて人間の基本的理念への要求が存在することを明らかにしている。「私たちは自らが統一体であって統合された個人であると考えることを好みます。実際、＜統合された＞という言葉は、おそらく、統合という徳と関連があるため、私たちがそうありたいと思わなければならないもののように感じられます。」[21]

本論文では、東洋に限って 3 名の思想家について検討したが、西洋に

眼を転じてみれば例えばニーチェ（F. Nietzsche）、キェルケゴール（S. Kierkegaard）、デカルト（R. Descartes）なども興味深い対象である。

‘virtue’ について精神分析の立場からのエリクソン（E. H. Erikson）の見解は極めて示唆に富んでいる。西平直は引用を通して、明解な説明を加えている。「徳（virtue）は潜在的には、生得的に与えられていながら、しかし、個人の責任のもとに現実化されてのみ、はじめて実際的な効力をもつということであり、人は潜在性の開花に対して、個人の生涯においても、また世代継承過程においても責任をもつということになり、それこそが新しい倫理の基礎であり、個人の生に内在的な目標であったということなのである。」[22]

「倫理の基礎」としての「徳」は当然のことながら、洋の東西を問わず人間に共通する基本的理念である。従ってエリオットの ‘Wisdom of Humility’ はその国の文化・文明、歴史等により、或は「言葉」により多少の差異はあれ、supreme virtue として今後とも引き継がれていくであろう。『武士道』の、『論語』の、そして『善の研究』の理念が今日尚、現代に生きる「人間の心」に生きているように。

Notes

1 主として以下の 2 冊による。
Stephen Spender, *Eliot* (Glasgow: William Collins & Co. Ltd, 1982)
Caroline Behr, *T. S. Eliot A Chronology of His Life and Words* (London and Basingstoke: The Macmillan Press Ltd, 1983)

2 Alfred Adler, 高尾利数訳『人生の意味の心理学』（東京：春秋社 , 1985）, p. 147.

3 T. S. Eliot, *Selected Essays* “Tradition and the Individual Talent” (London: Faber and Faber Limited, 1980), p. 15.

4 Spender, *op. cit.*, p. 24.
5 *Ibid.*, p. 23.
6 Valerie Eliot edited, *The Letters of T. S. Eliot*, volume 1 (London: Faber and Faber, 1988), p. 99.
7 *Ibid.*, p. 104.
8 *Ibid.*, p. 114.
9 Spender, op. cit., p. 50.
10 Behr, *op. cit.*, p. 22.
11 倉橋淑子 ,「T. S. Eliot: Chaos から祈りの地へ」『サイコアナリティカル英文学論叢』第 30 号（山口：サイコアナリティカル英文学会 , 2010）, pp. 9-23.
12 *Ibid.*, pp. 9-23.
倉橋淑子 ,「『四つの四重奏』―受容への道『サイコアナリティカル英文学論叢』第 15 号（山口：サイコアナリティカル英文学会 , 1992）, pp. 37-53.
13 Behr, *op. cit.*, p. 63.
14 Inazo Nitobe, *Bushido The Soul of Japan* (Japan: Tuttle, 1969), p. 25.
15 新渡戸稲造著、矢内原忠雄訳『武士道』（東京：岩波書店 , 2013）, p. 54.
16 宇野哲人『論語新釈』（東京：講談社 , 2014）, p. 481.
17 *Ibid.*, p. 63.
18 *Ibid.*, p. 91
19 西田幾多郎『善の研究』（東京：岩波書店 , 2012）, p. 328.
20 *Ibid.*, p. 203.
21 S. T. リーヴィ、渡辺学訳『精神分析と宗教』（東京：玉川大学出版部 , 1995）, p. 91.
22 西平直『エリクソンの人間学』（東京：東京大学出版会 , 1993）, p. 45.

The Joy Luck Clubをユング派の分析心理学で読み解く
――エーリッヒ･ノイマンの女性心理発達史を参照して――

森　岡　　稔

はじめに

中国系アメリカ人二世の作家、エイミ・タン（Amy Tan, 1952 －）の『ジョイ・ラック・クラブ』（*The Joy Luck Club*, 1989）は、[1] 機知と勇気によって数々の不幸な体験を乗り越えていく移民たちのたくましさを描いている。小説は、中国系アメリカ人の母たちと娘たちの物語で、父親は登場しない。一世の母親たちは中国という父系社会から逃れてアメリカという別天地で自由を獲得したものの依然として父系社会の過去を引きずっている。そのような一世たちを二世たちは嫌うが、その一方で、父系社会で耐え忍んだ母親たちの生きざまに敬意を払っている。「ジョイ・ラック・クラブ」は、一世たちが麻雀をしたり、料理を楽しんだりする集まりであり、集まってはアドバイスをもらったり互いに励まし合ったりしたクラブである。『ジョイ・ラック・クラブ』は、麻雀で「親」が順番に回っていくように語り手が移っていき、4 人の一世、4 人の二世、合計 8 人の主人公がそれぞれ二回ずつ語っていく小説である。

４人の母親たちは、アメリカに移ってくる前の第二次世界大戦中の中国での困難な生活を語り、４人の娘たちは、中国系アメリカ人としての二世の生活を語る。母親たちは父系社会の中国社会において、男性優位の生活をさせられてきた。彼女たちは自分の感情を表に出すことは許されず、何も望んではならず、ただ男性たちに従属するだけであった。彼女たちは、絶望した生活から逃げてきて希望に満ちた人生を求めてアメリカに渡ってきた。エイミ・タンは二世であるから、ある程度の距離感をもって、一世

たちの暗い過去を描く。母と娘の生活様式や考え方の隔たりは、移民たちの中国文化とアメリカ文化の相違を反映する。二つの文化が交わる際の確執や融合あるいは受容がどのようになっているのか、また、どうあるべきなのか、そういった問題をこの小説は浮き彫りにしている。

『ジョイ・ラック・クラブ』は母娘の関係をテーマにしている。母娘の関係を考察するのに、ユングの分析心理学の視点から見る場合、ユングの高弟、エーリッヒ・ノイマン（Erich Neumann, 1905―1960）の『女性の深層』（*The Fear of the Feminine*, 1980）の著書を除いて他にふさわしいものは見当たらない。[2] ノイマンには、『女性の深層』以外にも、『意識の起源史』（*The Origin and History of the Consciousness*, 1984）や『アモールとプシケ』（*Amor and Psyche*, 1973）という著書がある。[3]『意識の起源史』は、ノイマンが、ユングの拓いた深層心理学に人類史的な時間軸を取り入れた画期的な著書である。『意識の起源史』は、「グレートマザー」の段階から進んで、英雄神話に象徴される「自我」の確立と、個人の人格発展の道、すなわち「個性化過程」を提示する。『アモールとプシケ』は、やはり神話に題材をとりながら、アニマとアニムスの関係を考察したもので、『女性の深層』同様、女性の自己実現である「個性化」を追究している。

『ジョイ・ラック・クラブ』の中の二世の娘たちは、自分たちが自立していくためには、古い価値を押しつけてくる母親から逃れなければならないと思っている。二世たちは、アメリカ社会に同化しようとするが、数々の挫折に遭う。彼女たちは、二世たちの血の中にある中国人の体質もその一因であると思っている。その度に自分たちのルーツが「中国系」であることを恨み、その恨みを母親たちに向けたいが、そうかといって愛する母親たちにその責任を負わせることはできない。つまり、「アメリカ人」になろうとしている娘たちは、古い体質をもっている母親たちを捨てなければならない一方、母親への深い愛を強く感じているジレンマに立たされるのである。

ところが、実際には、中国系のアイデンティティとアメリカ人のアイデンティティが、彼女たちの内部では争わず共存できることに次第に二世たちは気づいていく。信じられないほどの辛酸をなめてきた母親たちの姿に共感し、娘たちは母親たちを何とか理解しようと、世代間の溝を懸命に埋めていこうとする。母娘の関係ばかりでなく。女性が人格形成をしていく上で、「女性的なるもの」が「男性的なるもの」とどう関わっていくべきかをこの『ジョイ・ラック・クラブ』という小説は教えてくれる。ノイマンの『女性の深層』を参照しながら、女性の生涯における心理発達の過程がこの小説の中にどのように示されているのかを見ていきたい。

1. ノイマン『女性の深層』の中の神話「デメーテールとペルセポネー」

1980 年に出版されたノイマンの『女性の深層』はエーリッヒ・ノイマンの短編論文を収めた三巻の論文集『中心をめぐって―文化の深層心理学論文集』（*Umkreisung der Mitte*, 1953）のうちの第二巻『女性的なものの心理学』（*Zur Psychologie des Weiblichen*, 1953）を日本語に翻訳したものである。エーリッヒ・ノイマンは多くのユングの弟子たちの中でも特に優れており、彼は当初から、自我、グレートマザー、母権社会、父権社会、元型といったテーマを扱い、人類史になぞらえて意識の発達段階を考察した。近代ヨーロッパの意識の中心を占めているのは父権的意識にほかならないが、母権・父権の概念は、もともとスイスの文化史家 J・J・バッハオーフェン（Johann Jakob Bachofen, 1815-1887）の『母権論』（*Das Mutterrecht*, 1861）に基づくものである。[4] ノイマンは、バッハオーフェンの『母権論』を土台に、『意識の起源史』で扱った心理発達史を推し進めて、『女性の深層』を著し、女性の意識発達の過程を弁証法的に論じた。

1.1. 父権的ウロボロスの侵入

エイミ・タンの『ジョイ・ラック・クラブ』について論究する前に、ノ

イマンの『女性の深層』にあるギリシア神話「デメーテールとペルセポネー」をとりあげたい。その神話は、ペルセポネーが花を摘むシーンから始まる。この「花を摘む」というペルセポネーの行為は、「処女性を破壊する」ことを表す。「花を摘む」あるいは「摘まれる」という行為は、処女である自分に終止符を打ち、真に現実の生活に立ち向かって行くことを示している。この行為の直後にハーデースが出現し、ペルセポネーを冥界に連れ去って行く。ノイマンはこれを「父権的ウロボロスの侵入」と言っている。ノイマンによると、女性は必然的な発達過程として、「男性的なるもの」（父権的ウロボロス）の侵入を許し、死ぬほど不安になりながらも全身全霊で感動を体験し、自己保存の段階から、自己放棄の段階に移行していく。「母権的ウロボロス（無意識）」の中でまどろんでいた自己保存の段階に「父権的ウロボロス」が侵入してくることは、「意識」が侵入してきたことに他ならない（ユングによれば、この時男性は、囚われの処女を竜から救い出す「英雄」の任務を示している）。しかし、母はこうした男性の侵入に対して、男性と敵対関係に陥ることを余儀なくされる。神話では、デメーテールは 10 日にわたって世界の隅々まで娘を探し求める。そして、デメーテールはハーデースによるペルセポネーの誘拐に夫ゼウスが一役買っているのを知ると、悲しみと怒りのあまり豊穣の女神として働くことを拒否するのである。

1.2.　母娘の結託

ハーデースという「男性的なるもの」（父権的ウロボロス）と裏で結びついていたゼウスもまた「父権的ウロボロス」である。その危機に対し、母娘（デメーテールとペルセポネー）が結びつきを強化して「父権的ウロボロス」に対抗することは一部として予想される。

父親不在である『ジョイ・ラック・クラブ』の場合、母娘の「父権的ウロボロス」への対抗心は、父権的社会である中国の文化や娘の夫に向けら

れている。母が、「父権的ウロボロス」に対して恨みや鬱憤を述べ、娘も同意することで、母娘の結託は成立する。「母娘の姉妹的関係」と言ってもよい。その場合、娘は、すでに父あるいは父権社会に傷つけられている母をこれ以上傷つけないよう、「わがまま」を言わないよう、「いい子」にしていなければならない。傷つき疲れ切った母を支えるために、「姉妹的関係」が進むと、娘と母が入れ替わって娘が母の役割をする場合さえある。

1.3. 母からの離脱

ゼウスやハーデースといった「父権的ウロボロス」を「仮想敵」と見なすことによって母娘が結託をする一方で、実は、ペルセポネーはハーデースに略奪されたことを喜んでいるふしがある。それは、母からの離脱をハーデースが助けてくれたからである。ペルセポネーが母の庇護を離れて危険な野原に「花摘み」に出かけたのは、母親からの離脱を準備するためであった。すなわち、「父権的ウロボロス」の侵入を期待して、母娘の関係への男性の介入を準備していると考えられるのである。それと同じような動機で、ペルセポネーは自ら進んで禁断のザクロを食べ、呪術をかけられハーデースのところに居なければならなくなる。つまり、そうすることによって、母親との関係を保ちながらも母親との距離を置く行動に出たのである。デメーテールもうすうす娘の裏切りに気付き、ザクロをペルセポネーが自分の意志で食べたかどうかをとても気にするのである。

一年のうちに四ヶ月間、冬にしてしまうほどの母の嘆きにもかかわらずペルセポネーがハーデースのもとに戻るのは、一見運命に流されるままに生きているように見えながら、実はそれは巧妙に母の完全支配を免れるという娘の策略なのであった。『ジョイ・ラック・クラブ』の場合でも、母と「仮想敵」の夫との狭間に、娘は自分の自立性を獲得している。「女性の自立」はこのように、一生かわらない母娘の関係の中で、微妙なバランスを保ちながら、形づくられていく場合が多い。ノイマンは、「女性の自立（自律）」

がさらに次の段階に進むことを示唆する。

> 女性的なるものは、男性的なるものの働きかけを俟ってはじめて開花するのであるが、意識への解放もまた英雄の役を演じる人物に依存している。女性的なるものがさらに後の高い発達形態に達してはじめて、女性はこの男性的なるものを内的なものとして経験し、自分の内にその存在を見るにいたる。そのとき女性は、その“自律性”に到達し、外なる男性の伴侶からしかるべき独立を達成することができるのである。（『女性の深層』、p. 37）

「外なる男性の伴侶からの独立」といっても離別することではなく、伴侶に対して一方的な依存の関係から脱却して、伴侶に依拠しながらも独立・共存していくことを指す。これが女性の「個性化」である。[5] したがって、『ジョイ・ラック・クラブ』の中で、自分に誇りをもつことが大切だと、母が娘に教える場面がいくつかある。母から自立し、男性という伴侶との間においてもアニマとのバランスを保ちながら、「内なる異性＝アニムス」を夫に投影し、[6] 自己を確立していくことが女性の「個性化」の本質である。

2．ノイマン『女性の深層』とエイミ・タン『ジョイ・ラック・クラブ』

『ジョイ・ラック・クラブ』において語りは、次の４組の母と娘の組み合わせによって行われる。①スーユアン・ウー（Suyuan Woo）とジンメイ・ウー（Jing-Mei Woo）②リンド・ジョン（Lindo Jong）とウェヴァリー・ジョン（Waverly Jong）③アンメイ・シュー（An-Mei Hsu）とローズ・シュー・ジョーダン（Rose Hsu Jordan）④インイン・セント・クレア（Ying-Ying St. Clair）とリーナ・セント・クレア（Lena St. Clair）、である（前が母、後が娘）。①のスーユアンは、すでに死んでいるので、代わりに娘のジンメイが語ることになっている。『ジョイ・ラック・クラブ』の登場人物た

ちが、『女性の深層』の中の類型の何にあてはまるのか、③→②→①の順で見ていきたい。[7]

2.1 アンメイ・シュー（一世）とローズ・シュー・ジョーダン（二世）の場合：家父長制度への反逆

2.1.1 アンメイ・シューの家父長制度への反逆

ローズ・シュー・ジョーダンの母、一世のアンメイ・シューは、家父長制度の規範に背いた女性がどれだけか過酷な扱いを受けたのかを物語っている。アンメイ・シューの実父が死んだあと、ウー・チン（Wu Tsing）という金持ちの第４夫人となったアンメイ・シューの母は、本当は第２夫人の策略で、ウー・チンによって手籠めにされたのに、貞淑な未亡人の道を踏み外し先祖の名誉を傷つけたとして、実家を追い出され非難される。第４夫人として生きる道しかなかったアンメイ・シューの母親の悲劇は、まさに家父長制がいかに女性を従属的に扱い、男性に都合のよい立場においてきたかを明らかにする。アンメイ･シューは彼女の伯母から「女の子は、何のあとについていくかで決まるのよ！」（“A girl is no better than what she follows.”［p. 218］）といわれ、男性優位の社会通念の中にいた。中国という父権社会の中で生きてきた一世たちは、女性としてどのような心理発達をしてきたのだろうか。

前章で考察した「父権的ウロボロスの侵入」によって女性は意識を取り入れるのであるが、アンメイ・シューの母の場合、ウー・チンによる「父権的ウロボロスの侵入」があるにもかかわらず､その後に女性の「個性化」への道をたどらない。意識を取り入れたのはよいものの、男性が心理的な優位を占め、優位のもとに父権制結婚をしている場合、抑圧の中に閉じ込められてしまうからである。ノイマンは次のように言う。

父権制の時代における結婚、略して“父権制結婚”は、男女両性の

> 双方にかかわる多種多様な精神状況を内に含んでいる。見かけは父権的形態をとっているこの結婚生活の裏には、精神的に厄介な問題がいっぱい潜んでいて、現代の結婚生活や教育における夥しい障害の原因となっている。・・・父権制は外形でしかなく、結婚生活のいわば仮面（ペルソナ）にすぎず、その裏には別の、父権制とは対立さえするような夫婦関係が隠れていることも少なくない。（『女性の深層』、pp. 40 － 41）

夫婦関係は、人間に本来の備わっているアニマやアニムスによって成り立っている。人間は、男性も女性も本来「両性具有的」であり、結婚生活が見かけ上、父権制のもとにあるようでも、実際は、夫も妻もそれぞれがアニマ、アニムスを投影しあう関係にある。

しかしながら、父権制結婚を強力に成り立たせている父権文化においては、女性は劣等者の役割を押しつけられている。フロイトの「ペニス羨望」の説明は、[8] このような父権的状況を表す極端な例である。そのままでは、女性の「個性化」の可能性が失われてしまう。「女性なるもの」の精神発達を危うくしているのである。ノイマンは父権的結婚生活の中に潜む「女性的なるもの」の危機を次のように指摘する。

> 男性的父権的な結婚生活では、妻はその女性的なものの制限どころか衰退を蒙ることになる。女性の自己意識の基礎であるグレートマザーとの本源的関係や、超個人的なものへの関係をうち立てた父権的ウロボロス状態から抜け出すことに意味があるのは、それによって新鮮な原動力が加えられ、発達がさらに続けられる場合である。しかし、女性的なるものが父権段階に拘束されると、このような発達は進行をとめられてしまう。（『女性の深層』、pp. 40 － 41）

父権的な文化規範においては、女性的なるものの価値がなかなか認められないのだ。実は、このような父権的社会の欠陥を指摘し、是正する意味でノイマンは『女性の深層』を書いたのであった。「女性的なるもの」が父権制のもとで劣等的な監禁状態になって、精神的活力を喪失すると、女性はもう一度、デメーテール＝コレー（ペルセポネー）状態にもどろうと退行することがある。ノイマンは次のように言う。

> 女性的なるものは卑賤な地位におかれ快楽の対象として濫用されたあげく、男性的なものに復讐する。女性的なるものは、母権段階の男性敵視にまいもどるのである。善なる女性的なるものは、夜ごと男性的なものに生気を吹き込み、昼の活動に向けて新しい誕生を準備してやるが、悪なる女性的存在は、男性的なるものを八つ裂きにする。（『女性の深層』、p. 53）

男性との生活に幻滅した女性は、退行してデメーテール＝コレー（ペルセポネー）状態に舞い戻ったあげく、男性に復讐しはじめるのである。夫婦生活に表面的にはおさまっていても、また父権的社会に「忠実」でありすぎるほど我慢していても、「個性化」の疼きに耐えられなくなり、反逆や離婚や自殺を目論むこともあるのだ。

『ジョイ・ラック・クラブ』にその典型がうかがえる。天津のウー・チンの第４夫人となった母と一緒にアンメイはウー・チンの家に引き取られた。その家で権力を握っていたのは第２夫人であった（正妻の第１夫人の他、第２夫人以下は妾である）。ウー・チンのような父権社会の権化のような暴君に加担するのは第２夫人のような女性であったりする。第２夫人の嫌がらせに耐えきれなくなったアンメイの母は、一計を案ずる。

旧暦の正月がくる二日前に、アンメイの母は服毒自殺をする。アンメイの母は「毒が体に回った時、母は私に囁いた―自分の弱い心を殺してで

も、あなたに強い心をあげたいと思ってね」。（“When the poison broke into her body, she whispered to me that she would rather kill her own weak spirit so she could give me a stronger one.”［p. 240］）と言いながら死んだ。言い伝えでは、旧暦の元日には魂がもどってくるという。もどってくるアンメイの母の霊魂に復讐されるのをウー・チンは恐れた。アンメイも「母の夢を見た」、ということをウー・チンに話して彼を誘導する。いよいよ元日となり、アンメイの母の霊魂に復讐されるのを恐れたウー・チンは、もっとも粗末な白木綿の喪服を身につけ、訪れたアンメイの母の霊に、アンメイと彼女の弟とを自分の嫡子として育てると約束した。そしてアンメイの母を第１夫人として、ただ一人の正妻として崇めると誓う。その日以来、第２夫人の髪が白くなり始め、それまで服従するしかなかったアンメイは怒鳴ることを覚えた。アンメイの母は自殺という形で、またアンメイは策略でもって母のうらみをはらし、父権社会に反逆したのである。

先にも述べたように、夫婦関係は、人間に本来の備わっているアニマやアニムスによって成り立っていて、夫も妻もそれぞれが、アニマ、アニムスを投影しあっている。だから、女性が真に「個性化」するには夫の協力が不可欠である。『ジョイ・ラック・クラブ』ではウー・チンという暴君のような夫はアンメイの母の感情をもてあそび、疎外し、完全に「女性的なるもの」の発達を不可能にしてしまった。そこでアンメイの母は、ウー・チンのこころの内部にある「アニマ」に攻撃をしかけたのである。アンメイの母は自殺することによって、ウー・チンの「アニマそのもの」となり、彼のこころをわしづかみにする。アンメイは、ウー・チンのこころに潜むアニマを刺激して復讐をやり遂げるのである。父権社会では、ペルソナ的な外面の力が強い。ところが、それに反作用して、アニマも強大化するのである。アンメイの母と、アンメイは、意識して母娘の結託をはかろうとしたわけではないが、デメーテール＝コレー状態にもどって父権社会に復讐したのである。

中国の父権社会でなくても、結婚生活において女性の「個性化」は困難をきわめる。ノイマンは、女性の「個性化」において、夫婦の相互関係の難しさを次のように述べている。

> 妻の側に男性－女性の関係の変化があれば、どの発達段階であれ、必ず夫の側にもそれに対応する変化がなければならない。夫婦の不和や離婚のよくある原因の一つは、夫婦のどちらかが人間発達のうえで、相互関係の新しい段階に入ることを必要としているのに、もう一方がそれに無理解であったり、この発達をともに担ってやることができなかったりするために、痛ましくも挫折してしまうことにある。（『女性の深層』、p. 61）

言われっぱなしの夫の言い分を想像してみよう。父権的社会にあって、男性は男性的な心を発達させるように奨励されて生きてきたので、それまで男性性しか要請されず、「女性的なるもの」の理解をしようと思う習慣がない。一方、女性は「女性的なるもの」を育まなければならないし、父権的社会にあっては「男性的なるもの」も確立していかなければ、男性に伍していくことができない。だからといって、女性が「男性的なるもの」を追究しすぎると、「女性的なるもの」が後退して、つまらない女性になり、自己疎外を感じることさえある。そうならないように、「男性的なるもの」と「女性的なるもの」の両方のバランスをとりながら、女性は「個性化」をめざしていかなければならないのだ。『ジョイ・ラック・クラブ』の登場人物たちは、結婚生活の中で母の助けを借りながら女性の生き方を真剣に考え、女性の「個性化」の道を懸命に手探りで歩んでいく。

2.1.2.　ローズ・シュー・ジョーダンの男性の伴侶に対する姿勢

ローズ・シュー・ジョーダンが夫のテッド（Ted）と知り合ったのは、

彼女がカリフォルニア大学バークレー校に通っていたころである。彼女には、医学部進学課程の３年生であったテッドは中国系アメリカ人の男性とはちがってニューヨーク育ちのしっかりした性格をしているように思えた。テッドが彼女を彼の家族のピクニックに招いた時、彼の母親は彼女に、「これから医者になろうとするテッドは、患者や医者仲間たちが東洋人やメキシコ系に対して理解を示さないかもしれない」というようなことを言い出す。明らかな人種差別だと思った彼女はテッドにつつみかくさず言うと、彼は彼女をかばう。それをきっかけにローズとテッドの間に愛が育まれ、二人は結婚した。ところが結婚後、医者として「決断と責任」を負うテッドは、ある医療事故によって自信を失い「決断の人」ではなくなり、逆にローズに意見を求め、決断を任せるようになる。そもそも彼女は自分で決断をくだせるようなタイプではなかった。二人の間には断層ができる。

彼女の母、一世のアンメイ・シューには、ローズとはちがって信念があった。移民をしてきた彼女にとって、信念がなければ生きていけなかった。だから、娘にも「自分」というものを持って欲しかった。彼女は、肝心なのはその人自身なのだという考え方をしているので、名門の家族に対して卑屈に思う必要はないと、アンメイ・シューに言い聞かせる。

いろいろなことがあって、混乱したローズはテッドと離婚しようとする。彼女は中国系アメリカ人だという「負い目」から自分で自分をへりくだらせてきたのだが、それがもとでテッドは彼女のことを軽く扱い、浮気までするようになっていた。彼女はそんな生活に耐えることができなくなって、離婚を決意したのである。「四か所の×のところにサインしてほしい。落ち着くまでの経費として１万ドルの小切手を同封する」（“Sign 4x where indicated. Enc: check, to tide you over until settlement.”［p. 190］）という手紙とともにテッドが小切手を送ってきた。離婚すべきかどうか迷っている優柔不断な彼女を見て、母のアンメイ・シューは次のように言う。

> A girl is like a young tree. You must stand tall and listen to your mother standing next to you. That is the only way to grow strong and straight. But if you bend to listen to other people, you will grow crooked and weak. You will fall to the ground with the first strong wind. And then you will be like a weed, growing wild in any direction, running along the ground until someone pulls you out and throws you away. (p. 191)

アンメイ・シューによると、娘は母親の言うことを聞かないと、強く真っすぐに育つことができない。他の人の言葉を聞こうとして身をかがめると、曲がった弱い木になってしまい、強い風で地べたになぎ倒されてしまうので、雑草みたいに地べたを這って育ち、ついには誰かに引き抜かれて捨てられてしまう。このような信念を持つ母親の言うことを聞かなかったばっかりに、ローズがテッドと別れるはめになったかのようにアンメイ・シューは言うのである。ローズには、テッドがなぜ小切手を送ってきたのかわからない。一瞬、彼がまだ自分を心から愛しているのか、と思ったが、すぐあとで、彼にとって１万ドルは何でもない金額であり、彼女が彼にとって無に等しい存在だからということに気づいた。案の定、彼は、次のような内容を言ってきた。「離婚の書類にサインして返して欲しい。家が欲しいし、すべてをできるだけ早く終わらせたい。別の女性と再婚したいから」。（“He wanted the papers returned, signed. He wanted the house. He wanted the whole thing to be over as soon as possible. Because he wanted to get married again, to someone else.” [p. 194]）それに対しローズは、先の母親の「雑草」の話を念頭において、「あなたの人生から、そう簡単に私を引き抜いて捨てさせるわけにはいかないのよ」（“You can’t just out of your life and throw me away.” [p. 196]）と言いながら、彼にやすやすと家を渡さないと言い始める。彼女は、やっと自分の存在の重要さを見せなければならないということに気づいたのだ。そして事態は一転し、二人は和解していく。

医療事故によって自信を失い、「決断の人」ではなくなった弱い心の側面を見せたテッドは、ローズに意見を求めて、彼女の「アニムス」に期待を寄せる。無意識にも、夫を立てるという家父長的な姿勢をもっていたローズには、そんなテッドの要求に応えることはできなかったが、これが皮肉にも、ローズに「自我」を目覚めさせるきっかけとなった。彼女は、夫の中の女性的な側面を見ることによって、自分の描いていた男性的な理想像を一時、後退させる。夫婦双方が、アニマ・アニムスをめぐって相互理解と寛容をきびしく求め合っている。敏感になっているこの段階では、夫のやることなすこと、妻のやることなすことが、いちいち癇に障る。ところがこの段階を過ぎると、二つの「個性的存在」の生きた対決と出会いが、心の深層部分で行われ、互いに深い理解を経験することになるのだ。ローズの自分に目覚めた姿勢はテッドを圧倒し、ローズをもう粗略には扱わないだろう。

2.2. リンド・ジョン（一世）とウェヴァリー・ジョン（二世）の場合：母娘の確執

2.2.1. リンド・ジョンの自我のめざめ

リンド･ジョンがほんの赤ん坊のころに、彼女は大金持ちの女性ファン・タイタイ（Huang Taitai）の息子と婚約させられた。息子の名前はティエンユー（Tyan-yu）。リンド・ジョンが初めて未来の夫に会ったのは 8 歳か 9 歳のころであった。彼女が 12 歳の時、家が洪水に遭い、口減らしのためにファン・タイタイのところに嫁ぐことになった。ファン・タイタイは召使いや料理人に厳しい人だった。当然、リンド･ジョンにも厳しかった。リンド・ジョンはその生活の中でも、幸せを見つけようとする。彼女にとって夫のティエンユーは神のような存在であり、またその母のファン・タイタイは実の母親のように、無条件に尽くして従うべき存在であった。運命に押し流されるリンド・ジョンであったが、豪雨の中、吹きすさぶ風に

真実を教えられる。

> I couldn’t see the wind itself, but I could see it carried the water that filled the rivers and shaped the countryside. It caused men to yelp and dance. I wiped my eyes and looked in the mirror. I was surprised at what I saw. I had on a beautiful red dress, but what I saw was even more valuable. I was strong. I was pure. I had genuine thoughts inside that no one could see, that no one could ever take away from me. I was like the wind. (p. 58) [9]

彼女には風そのものは見えないが、彼女は風が河にあふれる水を運び、田園地帯を形づくる生命力を感じることはできた。目をぬぐって鏡を見つめると、鏡の中に、強くて純粋な自分の姿が見えた。運命に翻弄されながらも、リンド・ジョンは風によって自立の気持ちが自分に芽生えてくるのを感じたのである。

彼女はティエンユーを愛そうとしたが、彼は１つ下でさらに精神的にも幼かったので、彼女に触れようともしない。リンド・ジョンがティエンユーに「アニムス」を投影しようとしても、幼すぎてできないのである。彼はベッドで眠り、彼女はソファで眠った。しばらくして、リンド・ジョンは夫に夫婦の愛情とは違う､姉が幼い弟をかばうような感情が湧く。一方、ティエンユーの母、ファン・タイタイにとって、欲しいのはただ１つ、孫であった。その思いが昂じて、ファン・タイタイはリンド・ジョンの子種が流れるといけないからと、彼女を寝かせたままにした。そんな生活に耐えられなくなり、彼女は一計を案じる。

ある日の朝、リンド・ジョンは嘆き悲しむ大きな声を上げた。驚いたファン・タイタイたちは、彼女に泣いている理由をリンド・ジョンに尋ねる。彼女が言うには、夢にご先祖が現れて、怒っている。風で赤い蝋燭の火が消えたので、この結婚が不吉だという。この結婚が呪われているしるしが

３つある。一つ目は、ティエンユーの背中の黒い染みがどんどん大きくなって、彼の体を崩していくだろう（単なる「ほくろ」である）。二つ目は、私の歯が一つずつ抜け落ちていき、最後には話すこともできなくなるだろう（４年前に虫歯で奥歯が抜け落ちているのを見せる）。三つ目に、この家の侍女の腹の中にティエンユーの子種が宿っている（侍女は美男の配達人と関係していた）。この策略によって、ファン・タイタイにはめでたく孫息子ができ、リンド・ジョンには服と北京までの切符とアメリカへ渡る金が与えられた。彼女は次のような考え方にたどりついた。

> I remember the day when I finally knew a genuine thought and could follow where it went… I promised not to forget myself. How nice it is to be that girl again, to take off my scarf, to see what is underneath and feel the lightness come back into my body! (p. 66)

彼女は純粋な考え方にたどり着き、自分自身をしっかりと保ち、自由な行動力を得た彼女は新しい気持ちでアメリカに出発することができた。体が軽くなったと感じ、本当の自分を見つめることを覚えた。リンド・ジョンは、「父権的ウロボロス」によって自我が目覚めたのではないが、「風」という現象によって自立の道があるのを意識的に知ったのである。ノイマンによると、女性の精神疾患は、「父権的ウロボロス」に拘束され「個性化」が疎外された場合に起こる。そこで、リンド・ジョンのように「風」という「アニミズム的自然」、「超人間的存在」の助けを借りることによって、精神的発達への道を切り開くことがあるという。いわば「至高体験」である。宗教という形で「超人間的存在」との関係を築き、精神的発達のための救済がなされる場合もある。[10] リンド・ジョンは、「風」という「超人間的存在」によって自我に目覚め、呪術的なきわめて無意識をゆさぶるような手法を使って、父権的社会に別れをつげた。

2.2.2.　ウェヴァリー・ジョンの自我のめざめ

リンド・ジョンはこのようにして、アメリカに渡ってくる前の中国で、自立の精神を確立した。時は流れて、娘のウェヴァリー・ジョンは母や兄たちとでサンフランシスコのチャイナタウンで暮らしている。彼女は、兄のチェスに興味を持ち、チェスを覚えたところ、めきめきと才能を現す。ウェヴァリー・ジョンは勝負のこつがわかってきた。強い方には相手の弱みや利点がすべて見え、弱い方は疲れてきてすべてがぼやけてしまう。腕を上げたウェヴァリー・ジョンはチェス大会で優勝する。ライフ誌にも登場し、「天才少女」ともてはやされた。だが、「これが娘のウェヴァリー・ジョンよ」と母が自慢するのが、彼女には気にくわなかった。見栄を張って、娘の自慢をしないで欲しいと路上で強く彼女が抗議すると、母はウェヴァリーを無視する作戦に出た。そして、母親と彼女は通りで離ればなれになってしまう。ウェヴァリー・ジョンが家に戻ると、母親の態度はとても冷たかった。簡単に勝てるチェスの対戦相手とは比較にならないほどの母親の重圧にウェヴァリー・ジョンはうちひしがれる。しだいに、チェスの試合で勝つことができなくなってしまう。負け続けてチェスをやめた時は、14 歳であった。

時が経ち、ウェヴァリー・ジョンは最初の夫のマーヴィン・チェン（Marvin Chen）との間にできた子ども、ショーシャナ（Shoshana）を連れて離婚する。税理士のリッチ（Rich）に純粋な愛を感じ、彼と交際するようになる。リッチとの結婚を母に告げようとするため、ウェヴァリーは母が彼のために料理を作るという機会をつくった。

ところが食事の際、リッチは象牙の箸から、ソースまみれの茄子の大きな固まりを白いシャツ、そしてズボンの股に転げ落としてしまう。海老とグリーンピースの料理を、皆に行き渡るよう少しだけ自分の皿にとらなければならないのに、たくさん取ろうとしたのであった。そして、おかわりをするのが礼儀なのに、おかわりをしない。一番ひどかったのは、リッ

チは彼女の母の料理をそれと気づかずに批判したことであった。中国人は、中華料理の作り手の常として、自分の料理に自信がないそぶりをする。「アイ！ 塩がたりなかったわ、香りもないしねえ」（“Ai! This dish not salty enough, no flavor.”［p. 178］）、と言いながら運ばれる料理に、箸を差し出し、一口食べて絶賛すべきであった。ところがリッチは「ほんの少しソイ・ソースを垂らせばいいだけですよ」（“You know, all it needs is a little soy sauce.”［p. 178］）と言いながら、ウェヴァリー・ジョンの母の目の前でたっぷりと醤油をかけたのだった。別れる際には、中国人では、ごく親しい友人間でしか言わないファースト・ネームで両親を呼んだりした。とたんに、ウェヴァリーはリッチがくだらない男のように見えた。実は、ウェヴァリーを惨めな気持ちにさせようとする母の手口にひっかかったのだ。

母にきちんと話そうと憤りながら母の家に行くと、母の邪気のない少女のような寝顔を見てしまう。ウェヴァリー･ジョンは途方にくれてしまう。彼女はそこで悟る。彼女の失敗は、リッチを気に入ってもらおうというあせりからくるものであったということを。自分が戦っていたのは、実は自分自身であることにウェヴァリーは気づく。母は自分の弱みを全部知っていて、攻撃してくる。それに対抗しながら、頑張ってきたが、実はそれが自立への道を指し示す試練であったことがわかる。闘っていたのは、弱い自分自身であったのである。

デメーテールとペルセポネーの関係にまさにぴったりと二人はあてはまる。デメーテール役のリンド・ジョンにとってリッチは「父権的ウロボロス」である。リンド・ジョンは一見すると、リッチ攻撃をして娘を困らせているかに見えるが、実は「個性化」に向かって娘を鍛えているのであり、ずっと娘を支えている存在である。母娘の関係は、娘が母から自立する闘いをしている一方で、停泊地としての母に常に立ち戻っていく関係である。母に批判されるのがいやなくせに、褒めてもらいたいというけなげ

な関係である。娘にとって真に大切なのは、自分の心の発達であり、「個性化」である。ノイマンによると、「父権的ウロボロス」によって、ある程度心理的発達が進み、その変容が内面的に受容されると、超個人的な精神領域が急速に内面に向かって開けてくる。すなわち、どんどん「個性化」に向かっていく。ノイマンは、これを「女性の自我と女性の自己との出会い」であるという。[11]

2.3.　スーユアン・ウー（一世）とジンメイ・ウー（二世）の場合：移民たちの共通の願い

2.3.1. スーユアン・ウーの悲劇と願い

小説『ジョイ・ラック・クラブ』において、スーユアン・ウー本人が直接、登場して語ることはない。すでに彼女は他界しているので、スーユアン・ウーにまつわる話は娘のジンメイ・ウーが語る。そもそも麻雀のあとに皆で作った料理を楽しむという「ジョイ・ラック・クラブ」の集まりは、スーユアン・ウーが開いた。集まりは、一次、二次とある。第一次の「ジョイ・ラック・クラブ」は、サンフランシスコに来る前に、日本軍が攻めてくる前の桂林でスーユアン・ウーが最初の結婚生活を送っていたころに始めたものである。彼女は桂林に日本軍から逃れるために双子の赤ん坊とともに移動してきた。当時の桂林には毎日数千人の戦争の被害を避けてきた人々が流れ込み混乱を極めていた。そんな悲惨な生活の中で、少しは気晴らしのためにとスーユアン・ウーは「ジョイ・ラック・クラブ」をつくったのである。

> It’s not that we had no heart or eyes for pain. We were all afraid. We all had our miseries. But to despair was to wish back for something already lost… So each week we could forget past wrongs done to us. We weren’t allowed to think a bad thought. We feasted, we laughed, we played games,

> lost and won, we told the best stories... And that’s how we came to call our little parties Joy Luck. (pp. 24 − 25)

周りの人々はこんなときに毎週のように宴会を開く彼女たちを不思議に思う。だが、苦痛に心や目を閉ざしていたわけではなく、ただ怖かったのだが、絶望せず常に新しいことを考えるために、ご馳走を食べ、笑い、麻雀で勝ったり負けたりして、思う存分最高の話をし合った。それを「ジョイ・ラック・クラブ」と呼ぶようになったのである。

日本軍が桂林にも攻めてきたので夫のいる重慶に避難しようとした。それは悲惨な行程であった。高価な家財道具を捨てる者、飢餓や病気で死ぬ者、爆撃で死ぬ者、地獄のような光景であった。避難の途中に、スーユアン・ウーは二人の赤ん坊を置き去りにしていく。ジンメイ・ウーとは異父姉妹となるその赤ん坊のことを、スーユアン・ウーは片時も忘れたことはない。やっとのことで連絡がとれるような状況になったが、それを知らずにスーユアン・ウーは死んでしまっていたのだった。ジョイ・ラック・クラブのおばさんたちは次のようにジンメイ・ウーに話す。

> Your mother was a very strong woman, a good mother. She loved you very much, more than her own life. And that’s why you can understand why a mother like this could never forget her other daughters. She knew they were alive, and before she died she wanted to find her daughters in China…Tell them stories she told you, lessons she taught, what you know about her mind that has become your mind. Your mother is in your bones! (pp. 39 − 40)

スーユアン・ウーは、ジンメイ・ウーを自分の人生よりも愛していた。中国に残してきた娘たちのことも決して忘れなかった。スーユアン・ウーは

中国まで娘たちに会いにいきたいと切に願っていた。ジンメイ・ウーの体の中に母親が生きている。彼女は双子の異父姉妹と会って、母親から受け継いだものや母親のことをすべて話すことをおばさんたちに約束する。ジンメイ・ウーと母とのあいだには確かに、いつも暗黙の了解があった。同じように、ジンメイ・ウーは、おばさんたちの考えていることがわかる。おばさんたちは、自分たちの娘とジンメイ・ウーとを重ねあわせているのだ。おばさんたちは、自分たちの娘たちと理解しあっているかどうか、あるいは、おばさんたちがアメリカに持ち込んだ真実や願いを自分たちの娘たちはどれだけ理解しているのか、そういったことに対して本当は不安である。おばさんたちは、ジンメイ・ウーにアメリカに来て経験したことを中国へ伝えてほしいのである。

2.3.2. ジンメイ・ウーの母との確執と和解：根本的な「母権的意識」の存在

ジンメイ・ウーの母、スーユアン・ウーは娘に過度の期待をかけていた。自分の娘はピアノの天才だと信じていたが、ジンメイ・ウーが出場したピアノ発表会で、間違いだらけのさんざんな演奏をしてしまい、母親のスーユアン・ウーはひどく恥をかいた。ところが、スーユアン・ウーはそれぐらいの失敗などものともせずに、娘にピアノの練習を強いるのであった。ジンメイ・ウーは心の中で思う。「私は母の奴隷じゃないのだ。ここは中国ではない。母の言う通りにした結果どうなったか見ればいい。馬鹿なのは母の方だ」（“I wasn’t her slave. This wasn’t China. I had listened to her before and look what happened. She was the stupid one.”［p. 141］）と、反抗する。だが、スーユアン・ウーは中国語で「娘には二種類しかないんだよ。言うことを聞く娘と、自分勝手な娘のね！この家には片方の娘しか住めないの。言うことを聞く娘しかね！」（“Only two kinds of daughters,” she shouted in Chinese. “Those who are obedient and those who follow their own mind! Only

one kind of daughter can live in this house. Obedient daughter!”［p.142］）と言われると、ジンメイ･ウーはさらに反抗する。彼女の母を失望させたのは、ピアノ演奏の件だけではなかった。それからの数年、自分の我を通し、期待にそむいては、幾度となく母を落胆させてきたのだった。ジンメイ・ウーは自分が級長にならなかった、スタンフォードに入れなかった、大学は中退してしまったと回想する。彼女は母とは違い、なりたいものになれるなどと信じていなかった。自分にしかなれないと思っていた。母のスーユアン・ウーが亡くなったあと、ジンメイ・ウーは小さなころ練習したピアノを調律してもらい、そのピアノを弾いて感傷にひたることがある。母娘は一体のものであり、ともにアメリカという新天地で頑張ってきたのも事実だったからである。ノイマンはこの母娘一体の感覚を形成しているものを「母権的意識」と呼ぶ。すなわち、女性の「個性化」とは別個に、この「母権的意識」がずっと働いているのだ。[12]

女性には、「母権的意識」があるので、女性の「個性化」は、男性の「個性化」とはおのずからちがう。驚くべきことに、そもそも女性の「個性化」は、本当はすでに完成されているとも言えるのだ。男性との夫婦生活の間にアニマ・アニムスの関係をつくっていくものの、母娘はともに、「母権的意識」をもっているので、娘は母と分離や結びつきをくりかえすだけの話である。ノイマンによると、「母権的意識」は「宇宙的・心的体系のなかに根差した知恵になじみ、生命や自然に近く、運命と生きた現実に密着している」という。[13] したがって、ジンメイ・ウーは、おばさんたちの気持ちが直観的にわかり、自分が何をしたらよいか言葉に表さなくても理解しているのである。

ジンメイ・ウーは母、スーユアン・ウーが中国に残してきた双子の異父姉妹に会いに行く。姉妹は上海にいる。会いに行くまでの経過は次の通りである。中国に残してきた二人から一通の手紙がスーユアン・ウーのもとに送られてきた。彼女はずっとこの二人の安否を気遣い探していたのだっ

た。ところが、手紙がきたのは彼女が他界したあとで、手紙はジンメイ・ウーの父（アメリカでスーユアン・ウーは再婚した）が読み、そしてジョイ・ラック・クラブの仲間に届けられた。父親はおばさんたちに二人からの手紙の返事を託したのである。仲間のおばさんたちは、あれほど探していた二人が見つかったのに、スーユアン・ウーが亡くなってしまっているという悲劇に泣いた。おばさんたちは、スーユアン・ウーのかわりに、次のような手紙を送った。

> Dearest Daughters, I too have never forgotten you in my memory or in my heart. I never gave up hope that we would see each other again in a joyous reunion. I am only sorry it has been too long. I want to tell you everything about my life since I last saw you. I want to tell you this when our family comes to see you in China. (pp. 269 − 270)

愛する娘たちを片時も忘れたことがなく、喜びの再会ができるという希望をあきらめていなかった。長く会えなかったことだけが残念だけれども、これまでどんな人生をすごしてきたか､すべて話したいという文面である。おばさんたちは、スーユアン・ウーになりすまして、彼女の名前をサインした。

桂林に日本軍がやってきたので重慶に移動する途中で置き去りにした二人の赤ん坊の名はチュン･ユー（Chwun Yu）とチュン･フア（Chwun Hwa）で、「春の雨」と「春の花」という意味である。重慶に避難していくとき食料と衣類だけ残してそのスーツケースも捨てたが、疲労と怪我でもう一歩も進めなくなった。もうこれ以上は進めないと思った時、服の裏地を裂き、取り出した宝石を赤ん坊の肌着の中にたくし込んだ。家族の写真と謝礼を約束し、住所を書いた手紙を添えて二人の赤ん坊を置いてきた。赤ん坊を発見したのは年取った農婦で、夫と共に自分の子供のように愛した。農婦

たちは住所をたずねて、その場所に行ったがすでに移り住んでいた。一方、アメリカ人の婦人宣教師に助けられたスーユアン・ウーも置いてきたところへ行ったが農婦たちも移動していたので、二人の消息はわからなかった。スーユアン・ウーの上海にいる彼女の同級生の友達が、上海の百貨店でスーユアン・ウーにそっくりな子供を偶然見かけた。まさしく母が探していた二人であった。二人は、手紙を書いてスーユアン・ウーに送った。

ジンメイ・ウーは再会するため、上海へ旅立つ。空港でタラップを降りていくと、母そっくりの二人がいた。ゲートから出たとたん双方は駆け寄り、３人でただ抱き合う。抱き合っていると、しだいにジンメイ・ウーは、自分の中の中国人の部分がはっきりと見えてきた。家族の思い、血の繋がりが、ついに彼女の中の中国人の部分を解き放つ。

戦争といういわば男性原理から発した悲惨な世界を、「母権的意識」が救済し、克服していく。言ってみれば、この「母権的意識」がなければ、人類はとっくに滅んでいたのかもしれない。ノイマンはその洞察力でもって『女性の深層』において人類に貢献した「母権的意識」を明らかにしたのである。

おわりに

『ジョイ・ラック・クラブ』という小説は、たくましく生きてきた女性たちの姿を描くことで女性たちに家父長制の犠牲になることのないよう忠告をしている。また、中国文化とアメリカ文化を比較することによって、どちらが良いとか悪いとか言ったり、異文化同士がお互いをないがしろにしたりするのではなく、相互理解をし、尊重しあう環境づくりをしなければならないことも示唆している。

母娘が一体となって中国の伝統を引き継ぎながら、アメリカ文化に融け込んでいく逞しさはどこからくるのか。ノイマンはそのヒントをくれた。つまり生き抜く原動力になっていたのは、「母権的意識」ではないのかと

いうことである。『ジョイ・ラック・クラブ』は単なる仲良しグループの物語ではなく、「母権的意識」を確認しあってそれを原動力にして、母から娘へと女性の「個性化」にとって大切なものを伝えていく物語だと捉えることができる。

当初、単純に考えると、彼女たちの個人的な特質である明るさやたくましさこそが人生を肯定的にとらえるエネルギーとなっていると思われた。だが、ノイマンの発想を借りることによって、デメーテール＝コレーの母娘の関係から構築される女性心理発達史と、人間の歴史を大きく支えてきた「母権的意識」を考慮したならば、中国系移民たちがアメリカという新天地において人生を前向きにとらえるそのエネルギーの本質が、おのずから明らかとなったように思える。『ジョイ・ラック・クラブ』を読めば、娘たちが融和できないと思われたアメリカ的要素と中国的要素が、女性の「個性化」と「母権的意識」によって、うまくハイブリッドな状態にブレンドされていく姿を見ることができる。しかしこれは、アジア系アメリカ人だけの話でない。多文化社会アメリカにおけるマイノリティが、豊かにアイデンティティを探求していく一つの解決策となるにちがいない。

Notes

1　テキストについて原書は、Amy Tan, *The Joy Luck Club*, Vintage Contemporaries, Vintage Books (New York: Random House, 1991) を使用した。以下、作品からの引用は、(原書の頁数) で表す。作品の翻訳は、エイミ･タン『ジョイ･ラック･クラブ』小沢瑞穂訳、角川文庫（東京：角川書店 , 1992）を参考にし、自分の訳をほどこした。

2　エーリッヒ・ノイマン『女性の深層』松代洋一・鎌田輝男訳（東京：紀伊國屋書店、1980）を参照した。以後、この著書からの引用は、(『女性の深層』、頁数）と記す。独語から英語への翻訳本は、Erich Neumann, *The Fear of the Feminine*; translated from the German by Boris Matthews Esther Doughty, Eugene Rolfe, and

Michel Cullingworth (Princeton: Princeton University Press, 1994) がある。

3 エーリッヒ・ノイマン『意識の起源史上・下』林道義訳、（東京：紀伊國屋書店 , 1984-1985）及び Erich Neumann, *The origins and history of consciousness*; translated from the German by R.F.C. Hull (Princeton: Princeton University Press, 1995) と、エーリッヒ・ノイマン『アモールとプシケ』玉谷直實 , 井上博嗣訳（東京：紀伊國屋書店、1973）及び Erich Neumann, *Amor and Psyche*；translated by Ralph Manheim, (Princeton: Princeton University Press, 1971, c1956) を参照した。

4 日本語訳は、J.J. バッハオーフェン『母権論』岡道男 , 河上倫逸監訳（東京：みすず書房、1995）がある。

5 「個性化」は「自己実現」と読み替えてもよい。

6 「アニムス」とは、女性の中の「男性の理想像」をいう。一方、「アニマ」は男性の中の「女性の理想像」をいう。

7 ④は紙面上、割愛した。

8 「ペニス羨望」とは、フロイトの説であり、概ね次のようなものである。当初、女の子が男性性器を目撃し、劣等感を持ち、男性性器が自分についてないのは何らかの罰であると考え、男の子と同等になりたいと思い始める。ペニスをつけて産んでくれなかった母親を憎み、ペニスに関しては男の子と張り合えないと悟り、ペニスの等価物である赤ん坊への欲望に移ることが女性の完成だというものである。

9 秋山さと子『ユング心理学へのいざない』（東京:サイエンス社、2009）、p.182. によると、風について、次のようなイメージを述べている。「風は、激しい空気の動きであり、生命力や精神性を意味する。夢で風が強く吹く時は、（風は）感情の乱れ、エモーショナルなどをあらわし、情緒性の高まりによる破壊、または創造と考えてよい。古い考えが崩れ去って、新しいアイデアや自己洞察が得られるチャンスでもある。」

10 『女性の深層』、p. 58 を参考にした。

11 *Ibid.*, pp. 72 － 74. 参照。

12 *Ibid.*, pp. 77 － 131. 参照。

13 *Ibid.*, pp. 118 － 122. 参照。

Jane Austen の作品にみられる登場人物の体調不良について

湯　谷　和　女

１．18 世紀の二つの時代思潮の対立が人々の健康に不調をもたらした理由

Jane Austen は 18 世紀に生を受け、19 世紀に入って生涯を閉じた。つまり二つの世紀にまたがって人生を生きた作家である。18 世紀末から 19 世紀初頭と言えば二つの時代思潮が真っ向からぶつかった時期である。その思潮とは Dr. Johnson（Samuel Johnson）を代表とする新古典主義と William Wordsworth を代表とするロマン主義である。イギリスで近代小説が誕生した 18 世紀は、理性、安定、平凡、上品、洗練、正確、適切さを重んじ、常識にかなう行動が求められた。この時代のイギリスは植民地の拡大や貿易の振興による富国強兵策が取られ、大英帝国の強化が図られ国力が増した時代である。生活が安定するにつれて良識に基づく道徳的な文芸が求められ、ローマ帝国に安定と発展をもたらした皇帝 Augustus にちなんで、この時代を Augustan Age（「文芸黄金時代」）、または Age of Enlightenment と呼んだ。

しかし、18 世紀後半になるとこうした風潮に反する動きが出てきた。形式主義や理性一辺倒の考えに窒息しそうになり、「理性」、「自然の法則」、「進歩」といった 18 世紀の人々の精神を鼓舞した言葉を退け、想像力や情緒が再認識され、自然や人間個性が重要視されるようになってきた。それは庭園の趣向にも反映され、18 世紀前半には剪定され秩序と均整のとれた庭園スタイルが重んじられたのが、後半になると自然の美しさを生かした風景庭園が好まれるようになった。18 世紀後半から見られるようになっ

たこの新しい思潮がロマン主義である。ロマン主義は性善説に立脚し、人間を悪くするのは社会であると考え、人間の尊厳を回復することを目的とし、あらゆる束縛からの解放をめざして古典主義に挑戦した。ロマン主義で何よりも重視されたのは、感性、個性、そして想像力である。

Byron の *Don Juan* の一節、“Whom the gods love die young.” に象徴されるようにロマン主義を体現する詩人たちは ‘passion’ , ‘intensity’ の旋風を巻き起こし瞬く間に人生を駆け抜けた。

18 世紀の二つの思潮のぶつかりとそのうねりは人々の精神にどのような影響を及ぼしたのだろうか。世界はアメリカ独立宣言、フランス革命と変革の嵐が吹き荒れ、イギリス国内は経済革命が進行し、社会構造が大きな変化を見せる中で人の価値観も変わらざるを得なかった。このような世相は、この時代を生きた詩人、Samuel Taylor Coleridge の生き方によく反映されている。彼は心身の不安定から逃れるために阿片を常用し、脳裏に浮かぶ神秘と幻想と怪奇の世界をさまよったり、その夢から醒めて現実の世界に戻ったりした。このような二つの世界を去来する中で、彼はドイツ哲学を用いることで思想と感情の融合を試み、イギリスの文学思想に新しい思想の流れを吹き込んだ。[1] ドイツの思想家 Schlegel も「ロマン派的芸術は反対のものを融合することを好む」といい、「自然と芸術」、「詩と散文」、「観念と感覚」、「世俗と神性」、「生と死」などは結合しやすい組み合わせであると主張したが、[2] 同じ時代を生きた Austen が小説のタイトルを *Sense and Sensibility*、*Pride and Prejudice* と名付けた理由はここに由来することが分かる。

二つの対立事項を結合させるために不可欠なものが Coleridge によって示された imagination である。Dr. Johnson からは「時間つぶしの空想で学問研究の妨げとなる」と却下された imagination の働きは、Coleridge によって下記のように肯定される。

> This power . . . reveals itself in the balance or reconciliation of opposite or discordant qualities: of sameness, with difference; of the general, with the concrete; the idea, with the image; the individual, with the representative; the sense of novelty and freshness, with old and familiar objects; . . . and while it blends and harmonizes the natural and the artificial, still subordinates art to nature; the manner to the matter; and our admiration of the poet to our sympathy with the poetry. [3]

Coleridge によれば、古いものと新しいもの、自然と人工といった対立るするものを融合するのは imagination の働きによると言い、Jean-Jacque Rousseau も「感性こそ偉大なる才能偉大なる美徳の母である」と絶賛した。しかし、Maria Edgeworth は女性の感性には抑制する他の配慮がいること、感性と同時に知性を養うことが肝要で、日々これを実践することが大切であると説いた。

18 世紀から 19 世紀初頭のこの思潮のぶつかりはその後も長く人々に影響を与えた。まず社会の在り方が変化し、家父長制社会から個人主義社会に転換していったが、その転換期に戸惑い、心身の不調を訴える人が多くいた。それは小説にも描かれており、登場人物が抱える心と体の病気という形で具現されている。本論文では Jane Austen の小説に描かれている登場人物の心身の不調に焦点を当て、彼らが何故不調を訴えているのかを検証してみたい。

２．*Pride and Prejudice* の Mrs. Bennet の‘nerves’について

理性重視の古典主義の時代が去り、人生についての共通の見解がくずれ、人の感性が重視された時代に、Austen は Johnson の「sensibility に溺れると狂気じみてくる」との考えに立ち、少女期に書いた作品からすでに過度の感受性をたしなめそれを揶揄する喜劇的手法で創作を始めている。

Austen が 15 歳の時に書いた *Love and Friendship* では失神が生命をも奪いかねないと次のように若い女性にたしなめる場面がある。

> “My fate will teach you this . . . One fatal swoon has cost me my Life . . . . Beware of swoons Dear Laura . . . A frenzy fit is not one quarter so pernicious; it is an exercise to the Body & if no too violent, is I dare say conducive to Health in its consequences---Run mad as often as you chuse; but do not faint---.” [4]

上記の引用から読み取れることは、1）失神は当時女性の虚弱性、すなわち女性らしさ（失神＝女性らしさ）を表すものであるということ、しかし、2）それは因習的な固定観念で打破する必要があるということ、3）失神やヒステリーの発作に自己没入すると命取りになるという諭し、そして4）発作を起こしてまさに死のうとしている人が根拠のない素人分析により失神にまつわる固定観念を打破するように未熟な女性に訓示することの滑稽さ、がここに凝縮されている。

Austen は 12 歳から 18 歳の少女期に断片、短編、中編など数多くの小品を書き、20 歳頃から本格的に創作に入り、代表作 *Pride and Prejudice* に着手したのは 21 歳の頃である。彼女が選択した文学手法は comedy で人物を風刺的な立場から眺めることに徹した。David Cecil が “Her first literary impulse was humorous;” [5] と指摘するように、humour は Austen の創作に不可欠な要素であった。そのため *Pride and Prejudice* で心身の不調を訴えるヒロインの母親の Mrs. Bennet も喜劇的人物として描かれている。

> “Mr. Bennet, how can you abuse your own children in such a way? You take delight in vexing me. You have no compassion for my poor nerves.”
> “You mistake me, my dear. I have a high respect for your nerves. They are

> my old friends. I have heard you mention them with consideration these last twenty years at least. ” [6]

上記の引用は、作品の冒頭の Bennet 夫妻の会話の一部分である。年頃の娘を 5 人も持つ Mrs. Bennet は近所の屋敷に引っ越してくる財産家の独身男性、Mr. Bingley が彼女の娘の恰好の結婚相手になると考え何としても夫に表敬訪問してもらいたいが、肝心の夫、Mr.Bennet は妻の気持ちを知りながらも容易には応じない。結婚して 23 年になる Bennet 夫妻であるが、夫と妻はそりが合わず、夫は妻に合わせようとするどころかむしろ妻を苛立たせて楽しんでいる向きがある。妻は自分の希望どおりにならない時はいつも持病の ‘nerves’（「神経症」）を持ち出し、‘nerves’ が口癖となっている。

Mrs. Bennet の ‘nerves’ は何か事が起こるたびに顔を出す。Bennet 一家の屋敷、Longbourne は限定相続になっていて Mr.Bennet の死後は甥の Mr. Collins の手に渡ることになっていた。その Mr.Collins が次女の Elizabeth Bennet にプロポーズをした時、母親の希望に反して Elizabeth は躊躇なくきっぱりと断ってしまう。それを知った Mrs. Bennet は激怒し、“The morrow produced no abatement of Mrs. Bennet’ s ill-humour or ill health.”（115）と書かれているように彼女の怒りは翌日になっても治まらず体調を悪化させる。

作品の中で一家が最も窮地に追い込まれ Mrs. Bennet は体調を崩して何日も部屋で寝込む羽目になったのは、末娘 Lydia が駆け落ち事件を起こした時である。叔父夫妻と Derbyshire に旅に出ていた Elizabeth は姉からの手紙で Lydia の駆け落ち事件と家族の混乱状況を知り大急ぎで家に帰る。

> “I never saw anyone so shocked.. . . My mother was taken ill immediately, and the whole house in such confusion! . . . . My mother was in hysterics,

and though I endeavoured to give her every assistance in my power, I am afraid I did not do so much as I might have done! But the horror of what might possibly happen almost took from me my faculties.”（Vol. III, Ch. V, p.292）

“My mother is tolerably well, I trust; though her spirits are greatly shaken. She is up stairs, ... She does not yet leave her dressing-room.”（Vol. III, Ch. V, p.286）

Elizabeth が帰ってみると、一家は混乱状態で、事態に対処しようと粉骨砕身の努力をしているのは姉の Jane だけで、Mrs. Bennet はヒステリーの発作を起こしてベッドに横になったままで、体を動かせる状態であるにもかかわらず何日も自室に籠りっきりであった。

小説の冒頭から Mrs. Bennet の ‘nerves’ が問題視されていたが、これは 5 人の娘を結婚させなければならない Mrs. Bennet のプレッシャーが引き金となって起こる症状であることが分かる。彼女の希望どおりに事が進んでいる時は症状は起こらないが、彼女の希望が挫折しそうになると抑圧された彼女の感情が怒りとなって一気に爆発する。しかし、皮肉なことに彼女の不平不満が昂じれば昂じるほど娘たちは彼女に従わず、Mrs. Bennet は娘たちの幸せを願っているにもかかわらず、その想いが娘たちの希望と合致せず、家族から孤立し体調を崩すのである。[7]

実際に 18 世紀末に神経症は患う人の数は増加の一途を辿った。これは 18 世紀前半の家父長制家族の時代が去り、父親の支配と母親の服従という家庭図は崩れ、子どもを中心とする家庭内核家族の時代に移ったことによる心の不適合が原因であったと考えられる。Mrs. Bennet も無力感を覚え自信喪失になり神経症の発作に逃避したものと思われる。

Jane Austen の文学手法は喜劇であるため心の病を深刻なものと捉えるこ

とはない。*Pride and Prejudice* の中で “I hope I never ridicule what is wise and good. Follies and nonsense, whims and inconsistencies, do divert me, I own, and I laugh at them whenever I can.”（Vol. I, Ch. XI, p.57）と Jane Austen 自らが明かしているように、風刺の対象となるのは人々の愚行、愚かしさ、気まぐれ、矛盾といったものである。Mrs. Bennet の神経症も病気というより彼女のきまぐれと捉えられ、家族は彼女の神経症を放置している。

３．Mr. Woodhouse の ‘hypochondria’ について

Austen の円熟期に書かれた *Emma* はもっとも完成度の高い作品と認められている。この作品のテーマは妄想癖がもたらす禍いである。何不自由なく甘やかされて育ったヒロイン、Emma が暇つぶしに着想したのが ‘match making’ である。‘imagination’ は使いようによってはプラス、マイナスの両面に作用するが、Emma の妄想は傍迷惑なもので、作品は彼女の空想癖が教化されるという点に主眼が置かれている。しかし、John Wiltshire は彼の著書の *JANE AUSTEN and THE BODY* の中で “. . . no one has yet diagnosed Emma to be a novel concerned with health.” [8] と述べ、この作品は登場人物の健康問題がサブテーマになっていると指摘する。これは今まで誰もが気づかなかった指摘である。Wiltshire の主張を軸にして考え直してみると、確かに「人の健康と体の病」というテーマが物語の根底にあるように思われる。

Austen 文学の特徴の一つとして、作品の冒頭でヒロインに振りかかる災難が真っ先に提示される。ヒロインがどのような問題に巻き込まれようとしているのか、注意深く読むと作品の冒頭から捉えることは可能である。これは Austen が仕込む最初の plot である。作品が進むにつてその因果関係が明かされてゆく。甘やかされて何不自由なく育てられたヒロイン、Emma にも大きな問題が潜んでいる。それは長年一緒に暮らしてきた家庭教師の Miss Taylor が結婚して家を出てしまい、父親と二人っきりで

家に取り残されてしまったことである。

> “Such an eye!---the true hazle eye---and so brilliant! regular features, open countenance, with a complexion! oh! what a bloom of full health, and such a pretty height and size; such a firm and upright figure. There is health, not merely in her bloom, but in her air, her head, her glance. One hears sometimes of a child being ‘the picture of health;’ now Emma always gives me the idea of being the complete picture of grown-up health.” [9]

Miss Taylor は Emma を「大人の健康の完璧な絵姿」と表現する。上記の短い引用の中に 4 回も ‘health’ という言葉が繰り返され強調されている。この強調は問題をはらむ。Emma は健康に見える外見からは想像もつかないが、心は空虚なのである。確かに Emma は恵まれすぎているヒロインである。しかし、置かれた状況は閉塞感が漂い、誰よりも負荷のかかるヒロインである。彼女は Highbury 村の Hartfield の生家に、父親の Mr. Woodhouse と二人きりで取り残されたような に暮らしており、しかも父親の心配性のせいで Highbury 村からは一歩も外に出られない。

村の誰もが心から祝福する Miss Taylor の喜びに満ちあふれた結婚式が終わった日の夜、Emma は言いようのない悲しみに襲われる。

> . . . with all her advantages, natural and domestic, she was now in great danger of suffering from intellectual solitude. She dearly loved her father, but he was no companion for her. He could not meet her in conversation, rational or playful.（Vol. I, Ch. 1, p.7）

Miss Taylor を失った Emma の孤独は計りがたく、彼女は精神的危機に直面していた。美貌と健康が備わった彼女の見事な外見とは裏腹に精神は

空虚で、Miss Taylor が去った夜、Emma は父に背を向けて涙を流すのであった。その時、埋めることのできない心の空洞に、友人や知人の ‘match making’ をするという着想が浮ぶ。

Miss Taylor の結婚を悲しんだのは Emma だけでなく彼女の父親も同様であった。Mr. Woodhouse は晩婚であったため娘 Emma との年齢差は大きく、そのうえ体が虚弱で不活発な生活を送っていたため実年齢よりは老けて見えた。Avrom Fleishman は、Mr. Woodhouse のこのような症状から推測して ‘Two faces to Emma’ という論文の中で “[Emma’s] father . . . is clearly mentally ill. The diagnosis of his illness is probably *premature senility*, featuring acute anxiety. ” [10] と推論している。しかし、Mr. Woodhouse の症状は実態が伴わずこのような病名がつくものではないように思う。その点からいうと John Wiltshire の意見は理解しやすい。これといった病気でもなく、治療の必要もないのに「何か病気にかかっているのではないか」と過度に心配し、体の不調を訴え続けるところは ‘hypochondria’（「心気症」）の症状と合致している。早老症というよりは ‘hypochondria’ の方に近いと考えられる。そして健康をテーマとした喜劇作品 *Emma* の中で穏やかな笑いに導くためのテクニックとして Mr. Woodhouse の ‘hypochondria’ を適用したのではないかと推察される。

Mr. Woodhouse が村の薬剤師で医師でもある Mr. Perry を彼の腹心の友、彼の一番の味方としていつも傍に呼び寄せるのは、彼の心の安定に Mr.Perry の存在が欠かせないからである。

> His own stomach could bear nothing rich, and he could never believe other people to be different from himself. What was unwholesome to him, he regarded as unfit for any body; and he had, therefore, earnestly tried to dissuade them from having any wedding-cake at all, and when that proved vain, as earnestly tried to prevent any body’s eating it. He had been at the

> pains of consulting Mr. Perry, the apothecary, on the subject. Mr. Perry was an intelligent, gentlemanlike man, whose frequent visits were one of the comforts of Mr. Woodhouse's life;, and, upon being applied to, he could not but acknowledge,（though it seemed rather against the bias of inclination,）that wedding-cake might certainly disagree with many---perhaps with most people, unless taken moderately.（Vol. I, Ch. 2, p.19）

Mr. Woodhouse の体は高カロリーの食物を受け付けない。そして彼は Miss Taylor のウエディングケーキが健康に悪いと決めつけ、食べないように周囲の人を説得する。しかし彼の努力も空しく陰では誰もがおいしくケーキを食べていた。彼の唯一の味方である Mr. Perry までもが、Mr. Woodhouse の前では彼に同調しておきながらも、Emma が Mr. Perry に託したケーキを彼が子供たちに与えていたことが後日判明する。このように Mr. Woodhouse の意見をまともに聞き入れる人は誰もいない。このようなことは Mr. Woodhouse の日常によく起こることで、Mr. Woodhouse がごく親しい人を屋敷に招いて食事をご馳走する場面でも、彼の摂食過多に対する過剰な反応は招待客に功を奏さず、軽く受け流されてしまう。その様子はあまりにも滑稽でおのずと読者の笑いを誘う。

> "Mrs. Bates, let me propose your venturing on one of these eggs. An egg boiled very soft is not unwholesome. Serle understands boiling an egg better than any body. I would not recommend an egg boiled by any body else---but you need not be afraid---they are very small, you see---one of our small eggs will not hurt you. Miss Bates, let Emma help you to a *little* bit of tart---a very little bit. Ours are all apple tarts. You need not be afraid of unwholesome preserves here. I do not advise the custard. Mrs. Goddard, what way you to *half* a glass of wine? A small half glass---put

into a tumbler of water? I do not think it could disagree with you.”（Vol. I, Ch. III, pp. 24-25）

Mr.Woodhouse は Highburry 地区随一の地主で、村人の人望も厚く、社交の範囲は限定されているものの人付き合いは良く、親しい人を招待して食事をすることを楽しみにしていた。しかし、Mr. Woodhouse にとって食事は楽しみな反面苦しみでもあった。夜の食事は健康に良くないと信じている彼は、食卓に並べられた料理を観るだけでも気分が滅入り、快くもてなしたい気持ちと、客の健康を案じる気持ちの狭間で葛藤する。そこで彼は、自分のために用意された特別に薄いお粥、やわらかい小さなゆで卵、できるだけ薄く切ったアップルパイ、水で割ったワインなどを勧めるに留めるが、客はそのようなものを望んではない。Emma は父の余計な節介を無視し、客が遠慮なく食事を楽しめるようにミンスミートパイや焼き牡蠣を勧め、Hartfield の女主人として絶妙の心配りをして客をもてなす。

Mr. Woodhouse の ‘hypochondria’ の症状は、彼を敬愛してやまない Emma や寛容な彼の友人たちと過ごす時は何の弊害もないが、Emma の姉の Isabella が家族と共に嫁ぎ先の London からクリスマス休暇を過ごすために Hartfield に帰省した時、父親と Isabella の間でちょっとした口論が起こる。それは先の Michaelmas の休暇に、Isabella 一家が海辺の保養地に行ったために Hartfieled に帰ってこれなかったことを不満に思っている Mr. Woodhouse が、非難気味に発した言葉が引き金となって起こった。

父親の愚痴を真正面から受け止めた Isabella は父親に反撃し、互いに引き下がろうとしない。口論は Mr. Woodhouse の “It was an awkward business, my dear, your spending the autumn at South End instead of coming here. I never had much opinion of the sea air.”（Vol. I, Ch. XII, p. 101）という一言から始まる。これに対して Isabella は自己の正当性を主張したので、雲行きが怪しいと思った Emma が機転を利かせて口を挟み、双方の心証

を害しないように話題を変えようとする。

> “Come, come,” cried Emma, feeling this to be an unsafe subject, “I must beg you not to talk of the sea. It makes me envious and miserable;---I who have never seen it! South End is prohibited, if you please. My dear Isabella, I have not heard you make one inquiry after Mr. Perry yet; and he never forgets you.”（(Vol. I, Ch. XII, p. 101）

South End は London から東に一直線に進んだところにある北海に面した町である。1750 年代に Dr. Richard Russell が健康法に海水浴を取り入れることを提唱してから、彼の住宅があった Brighton が保養地として人気を集め、さらに摂政皇太子がそこに ‘Royal Pavilion’（「皇太子の別荘」）を建てたことをきっかけにイギリスの海岸に次々保養地が開発された。Austen も Dorset の Lyme Regis や Devon の Sidmouth に出かけたことがあり、Lyme Regis では海水浴も楽しんだと手紙に残されている。しかし、Emma は Highbury から一度も外に出たことがない。Emma が Hartfield から離れることを Mr. Woodhouse が嫌うからである。

Emma の努力により楽しく時間が過ぎ、その宵の最後にお粥が出された時、再び雲行きが怪しくなった。Isabella がお粥を食べながら不用意にも South End で雇った女料理人の作る粥がまずかったと言う一言から海岸保養地の話が再燃する。長女の Isabella は自ら “. . . but I assure you, excepting those little nervous head-aches and palpitations which I am never entirely free from any where, I am quite well myself; . . . ”（103）と明かすように、彼女もまた頭痛持ちで激しい動悸に悩まされるといった神経症の兆候があり、父親の遺伝子を受け継いでいることが分かる。Isabella は Miss Taylor が “At ten years old, she [Emma] had the misfortune of being able to answer questions which puzzled her sister at seventeen. She was always quick and assured:

Isabella slow and diffident.”（37）という述懐することから分かるように、頭の回転が鈍く、子供時代から 7 歳という年の開きがあるにもかかわらず、才気煥発な Emma にすぐに追い越されてしまうのが常であった。

父親と Isabella は場の雰囲気を壊すことも構わず、不適切な話題を延々と繰り返し、自己の主張に固執して問題を拡大するばかりで鎮める術を持たない。結局、この場は Emma と見識の高いもう一人の地主の Mr. Knightley の尽力によりなんとか治まる。

Mr. Woodhouse の ‘hypochondria’ は病気の実態が伴わず、彼の不平は誇張されていると周囲の人は見抜いている。食事摂食過多に対する心配も彼の自己中心癖に由来すると分かっている。彼は Emma が実家から遠くに離れないように絶えず病気を利用してけん制する。何故なら、家を離れることは結婚を意味するからである。このように自己中心的な Mr. Woodhouse が親しみをもって寛大に接してもらえるのは、彼の善意と寛容と心の暖かさのためである。Emma や Mr. Knightley は Mr. Woodhouse の要求を受け入れ、彼の病気によく対応しているが、それでも Mr. Woodhouse の不調は治らない。[11] それは彼が社会から受けるプレッシャーと自己の感情を上手にコントロールできないからである。

結論

18 世紀から 19 世紀初頭にかけてイギリス社会が経済革命の渦に巻き込まれ、その波の煽りを受け、人々は心身とも疲弊していたのは事実である。家長制家族形態から閉鎖的な家族中心の核家族に移行する過程で、親子関係が変容し、親は戸惑っていた。*Pride and Prejudice* の Mrs. Bennet は自立心旺盛な娘の断固とした主張に抗しきれず、また *Emma* の Mr. Woodhouse は、伝統的な地主を中心とする家父長制家族社会と長女 Isabella の嫁ぎ先の新しい家族中心の核家族社会の狭間で状況把握ができずに戸惑っている。そして自信喪失し、体調不良を起こしている。

以上、18 世紀から 19 世紀初頭にかけて、イギリスの社会変革がもたらした人々の心身の不調について述べてきたが、考えれば、この時代は国の首長である国王、George III が体調不良に陥った時世である。Fanny Burney が *The Court Journal and Letters* の 1788 年の記述に “I am nervous” he cried; “I am not ill, but I am nervous; if you would know what is the matter with me, I am nervous.”[12] と書き遺しているとおりである。Jane Austen の小説は時代色が濃く出ていないために普遍的であると言われる一方で、写実主義作家として当時の社会を正確に映し出し、時代の大きな転換期に伝統的な思想と新しい思想の板挟みになった人々の心の負荷を笑いとともに見事に描出している。

Notes

1 矢本貞幹著『イギリス文学思想史』p.130 に「コールリッジはドイツに遊学して以来、イギリス哲学に不満を感じてドイツの哲学者たちを耽読するようになった。」とあり、「コールリッジが大陸の思想家をイギリスに紹介してイギリスの文学思想に新しい観念の流れを作った」と述べられている。

2 August Wilhelm Schlegel, *Dramatic Art and Literature*. (London: G. Bell, 1902) p.342.

3 Samuel Taylor Coleridge, *Biographia Literaria*, Volume II, (Oxford: Clarendon Press, 1907), p.12.

4 *Love and Friendship* by Jane Austen in R. W. Chapman ed., *Minor Works*. (London: Oxford University Press, 1986), p. 102.

5 Cecil, David. *THE FINE ART OF READING*. (Tokyo: Kaibunsha Ltd., 1983,) p.61.

6 *Pride and Prejudice*, Vol. II, Ch.1, p.5, ed. R. W. Chapman (London: Oxford University Press, 1923; rpt. 1981). 作品からの引用はすべてこの版により、以後は巻と章とページ数のみ引用の後（ ）に入れて示す。

7 John Wiltshir, *JANE AUSTEN and THE BODY*. (Cambridge: Cambridge University Press, 1992), p. 21. 参照
“Mr. Bennet’s famous reply, ‘They are my old friends － I have heard you mention

them with consideration these twenty years at least', discloses when Mrs. Bennet's complaints (to use that usefully ambiguous term) began. Since this is just after the Bennets' marriage, a correlation between 'nerves' and sexuality seems to be implied. To use Freud's famous comparison between neurosis and desire, Mrs. Bennet's nerves are related to her spirits, as vinegar is to wine."
ウィルトシャーは、フロイトの神経症と欲望の相関性を引き合いに出し、ベネット夫人の神経症の原因を示唆している。

8 *Ibid.*, p.110.

9 *Emma*, Vol. IV, Ch. V, p.39, ed. R. W. Chapman (London: Oxford University Press, 1923; rpt. 1981). 作品からの引用はすべてこの版により、以後は巻と章とページ数のみ引用の後（ ）に入れて示す。

10 Avrom Fleishman, 'Two faces of Emma', in Jane Austen: *New Perspectives, Women and Literature*, (New Series) vol. 3, edited by Janet Todd, (New York and London, 1983), p. 248.

11 Bharat Tandon, ed., *Emma*: An Annotated Edition(The Bellknap Press of Harvard UP, 2012): Note (p.113) 参照：
"The solution to the riddle is a chimney-sweep…The fact that Mr. Woodhouse can only remember the first stanza may superficially recall his eighteenth-century literary antecedent, Uncle Toby in Sterne's *Tristram Shandy*, but his claim that "it is very clever all the way through" suggests tantalizingly unnarrated possibilities − especially since the riddle as a whole("To Kitty, Fanny now succeeds") is far too salacious ever to have made it into Elegant Extracts, whence Emma claims to have copied it….Jill Heydt-Stevenson comments cogently on some of the riddle's suggestions. Not only does she offer an extended reading of Garrick's sexual innuendos ("the riddle addresses the plight of a man [the narrator] who has been infected with venereal disease"), but she also follows the lead that Austen's narrative offers in the direction of Mr. Woodhouse's possible back-story…"Austen raises the ludicrous and hilarious possibility that the clearly asexual Mr. Woodhouse might have been a libertine in his youth and now suffers from tertiary syphilis. For example, Emma's father a hypochondriac, cannot bear to be cold and so prefers a fire, even in midsummer; the riddles narrator, ill with venereal disease, also longs for 'fire' to cure him. Both Mr. Woodhouse and the narrator despise marriage and want to surround themselves with young virgins, who will keep them 'well.' Further, it is also deliciously, though seditiously, funny that one

of the reputed cures for venereal disease was a light diet, mostly consisting of a thin gruel − Mr. Woodhouse's favourate meal."
この注釈者が示唆するのは、エマの父親ウッドハウス氏は、スターンの「叔父トウビー」の文学上の先行者であり、ウッドハウス氏はもしかしたら「リベルタン」であったかも知れないこと、またギャリックの謎解き詩は、その性的ほのめかし、つまりウッドハウス氏は昔は色男だったというほのめかしであり、健康保持に過度に気を遣うウッドハウス氏の心気症の原因について言及している。

12 Frances Bu Fleishman, rney, *The Court Journal and Letters of Frances Burney*, Vol. IV, ed. Lorna J. Clark. (Oxford: Oxford University, 2014), p. 519.

『クブラ・カーン』再考

木　村　保　司

人は、生物はなぜ生まれてきたのだろうか？あるとすれば、その目的は何なのか？宇宙が誕生して 138 億年。地球が誕生して 46 億年。600 万年前から、より人間に近い動物が現れます。しかし数百億年後には、宇宙はビッグリップという現象で終末を迎えるそうです。――「生はこれ楽にあらず、衆苦の集まるところ。死また楽にあらず、衆憂たちまち迫る。」フロイトやユングの夢の研究について読み返しているうちに、空海のこの言葉に出会いました。人はなぜ夢を見るのだろうか？また、アイスキュロスは、「死んでしまわないうちは、だれをも幸福な人間と呼ぶな。」とも言いました。私たちは、生の最終的な到達点である死を恐れ、不安におののいたりもします。すべての夢は死と連関するものであると仮定すれば、大方の批判を受けるかも知れません。が、生命ある肉体は常に死の危険に対する防御反応を示すものです。何のために生きるのか？人間とは何か？哲学者たちが延々と考えてきた命題でもありました。Coleridge（Samuel Taylor Coleridge,1772-1834）の詩には、自己体験に基づく再生の話が沢山あります。*Kubla Khan*（1797）を考えてみたいと思います。

Ⅱ

1797 年夏、Coleridge は Devonshire の Porlock 近辺の農家 Ashfarm で *Kubla Khan* を書いた。この時、リウマチを癒すために飲んだ阿片のため 3 時間余の眠りに陥ったが、それまで読んでいた Purchas の『旅物語』（*Pilgrimage*）の所為もあって夢を見た。この夢物語が *Kubla Khan* であ

る。夢の中では 300 行ほどの内容であったが、これを書き留めているとき Porlock から来た客人に 1 時間ほど応対していた間、夢の中で見た詩を忘れてしまい後が続かなくなったため、作品としては 54 行の断片となっている。断片ではあるが、その詩的音楽性と摩訶不思議な想像力のため余りにも有名な作品となっていることは、周知のことである。*Kubla Khan* の副題に *A Vision in a Dream* とある。これがいかにもコールリッジらしく、読者の興味と誘惑を目論んだ作為的演出とも言えようが、彼の生い立ちを知れば知るほど作品と関係するものが多い。自叙伝的書簡のなかで、次のようにその特異な性質の馴初めについて述べている。

> My Father found out the effect, which these books had produced--and burnt them. ---So I became a dreamer--and acquired an indisposition to all bodily activity—and I was fretful, and inordinately passionate, and as I could not play at any thing, and was slothful, I was despised & hated by the boys; and because I could read & spell, & had, I may truly say, a memory & understanding forced into almost an unnatural ripeness, I was flattered & wondered at by all the old women--& so I became very vain, and despised most of the boys, that were at all near my own age--and *before I was eight years old, I was a character--sensibility, imagination, vanity, sloth*, & feeling of deep & bitter contempt for almost all who traversed the orbit of my understanding, were even then prominent & manifest.[1]

彼が「夢想家」（a dreamer）になった痕跡は、幼少年期に見られる。Coleridge によると、彼の読書癖から起こる悪影響を心配した父親が本を焼き払ったことで、夢想する習慣がついた。これ以後、運動に全く興味を示さず「気むずかし屋で、怒りっぽく」なり、子供のする遊びができなか

ったので「怠け者」となり、子供たちから軽蔑され嫌われる存在として幼少年期を過ごしたという。また彼が阿片に侵される遠因はこの頃、兄の Francis と兄弟ケンカ（Coleridge は 10 番目の末子）をして家を飛び出し、近くの Otter 川で一晩過ごした時の寒さを起因とするリウマチを癒すために飲み始めたのが最初だという。後、10 歳で父親を亡くした Coleridge は、1782 年 7 月にロンドンの孤児院である Christ’s Hospital に入学することとなり、8 年間は故郷に帰らなかったようだ。この孤児院の頃、Charles Lamb や Evans 一家などと親交を深め、一方ではますます形而上学的思考にはまり、また一方では故郷 Ottery で失くした愛情を求め Evans 家との交流を切望し続けた。この時期に抱いた孤児意識はますます後の人間関係や作品に影響を与えてゆく。1791 年に Cambridge 大学に入学するのであるが、この頃（19 歳）より本格的にリウマチ治癒のため阿片に傾倒してゆくことになる。しかし初期においては「ケンブリッジは湿っぽいところで、リューマチには悪い。（薬としての）阿片は不愉快な結果を決して及ぼさなかった」という手紙も見いだせる。

> Cambridge is a damp place --- the very palace of winds: so without very great care one is sure to have a violent cold. I am not however certain, that I do not owe my Rheumatism to the dampness of my rooms. *Opium never used to have any disagreeable effects* on me ---but it has upon many. [2]

むしろ、快楽的で創造的な気分を味わうことができたのであろう。しかし阿片常習者となっている Coleridge の健康にとって薬物が良い結果をもたらすわけがないことも事実である。リウマチによる激痛 - 阿片服用 - 夢（白日夢）の連鎖が日常化してゆくことになる。

従って 1791 年の時は、リウマチ痛を癒すために服用していたものが 1796 年 3 月の時点では、精神的苦悩を癒すために服用している。この背

景にはコールリッジがドゥ・クエンシー（Thomas De Quincey）と同じように『阿片中毒の文人』として評されているが如く、当時のイギリスでは阿片を鎮痛剤として常用する習慣は中・上流階級やインテリ層の間では普通の事であり、中毒症状を示す患者は蔓延していたという社会環境があった。　英国国会が阿片の輸入を禁じたのが 19 世紀も後半のことである。またレフェビュー（Molly Lefebure）も 1793 年初め頃には阿片依存症になっていると指摘する。[3] これは注目すべき点で、彼が夢（幻想）見る詩人と言われる証左がそこにある。

これが証拠に 1798 年の手紙では「阿片は眠りではなく、休息を与えてくれる。この休息は、なんとも素晴らしいものです。砂漠の真ん中の魅惑な場所、泉と花と木々の生い茂る場所を提供してくれる。」（ ‘Laudanum gave me repose, not sleep: but you I believe , know how divine that repose is what a spot of inchantment, a green spot of fountain, & flowers & trees, in the very heart of a waste of Sands!’）[4] と書いている点が注目される。このような日常環境の中で夢に現れた世界が *Kubla Khan*（1797）なのである。それは阿片による一時的な快い白日夢なのか、事実、夢なのか。

In Xanadu did Kubla Khan
A stately pleasure-dome decree:
Where Alph, the sacred river, ran
Through caverns measureless to man
Down to a sunless sea.　（1-5 ）
クーブラ・カーンは命じて上都に
荘厳な歓楽宮を創りあげた。
そこには聖なるアルフ河が流れ、
人間には測り知れない洞窟をいくつも通りぬけ、
陽のない海へ流れ出ていた。

Coleridge が体調を癒すために Porlock の農家に立ち寄った先で見たというこの夢物語は全く快調で快楽的なものである。というのも、前年の 1796 年 3 月には、エドワーズ（John Edwards）に宛、“I have been obliged to take Laudanum almost every night.”[5] と書いている。また 1 2 月には、John Thelwall に 宛、“…my Health has been very bad-. & made the frequent use of Laudanum absolutely necessary.”[6] と書くに至る。このように、「阿片を毎晩服用しないではいられない」とか、「阿片を頻繁に使用することが完全に必要です」と告白している点からみると完全な阿片常用者であり、リウマチを原因とする激痛に悩まされ続けていたのである。そのような詩人が「聖なるアルフ河が流れ、人間には測り知れない洞窟をいくつも通りぬけ」と夢の状態を表現する。ロマンティックな情景であると同時に、『人間には測り知れない洞窟』は、無限の無意識の世界を表すのであり天国の山とは対照的な地獄の原型的イメージを表現している、と言えよう。そこにはユングが取り上げた元型としてのペルソナ・影・アニマ・アニムス・自己などが潜んでいるに違いない。元型としての洞窟の底は無限であり、神秘的であり、摩訶不思議な世界である。当然ながら陽が差すこともない暗闇の大海に導く摩窟である。強大な権力をもつクブラ・カーンですら、荘厳な歓楽宮を築き上げたにもかかわらず、未来的な恐怖や不安がつきまとう。この地上におけるどのような巨大な富も権力も現世においては、儚く虚しく有限である。ここにはプラスとマイナスのイメージが交錯する世界があり、詩人の現在の心境を投影したものが垣間見えよう。更に、

So twice five miles of fertile ground
With walls and towers were girdled round:
And here were gardens bright with sinuous rills,
Where blossomed many an incense-bearing tree;

And here were forests ancient as the hills,
Enfolding sunny spots of greenery.（6-11.）
その５マイルの二倍ある肥沃な土地には
城壁と塔が帯のように取り巻き、
そこの庭園には曲がりくねった小川がいくつも輝き
かぐわしい香りを放つ木々がたくさん花咲かせ、
ここの森は丘と同じように古く、
陽のあたる緑地をいくつも包み込んでいた。

ここでは上述した『阿片は眠りではなく、休息を与えてくれる。この休息は、なんとも素晴らしいものです。砂漠の真ん中の魅惑な場所、泉と花と木々の生い茂る場所を提供してくれる。』を想起させる。まさに楽園の世界である。しかし一方で、曲がりくねった「小川は、豊穣を象徴すると同時に冥界と現世を隔てる自然の障壁でもある」。[7]

But oh! that deep romantic chasm which slanted
Down the *green* hill athwart a *cedarn* cover!
A savage place! as holy and enchanted
As e’er beneath a waning moon was haunted
By woman wailing for her demon-lover!
And from this chasm, with ceaseless turmoil seething,
As if this earth in fast thick pants were breathing,
A mighty *fountain* momently was forced:
Amid whose swift half-intermitted burst
Huge fragments vaulted like rebounding *hail*,
Or *chaffy* grain beneath the thresher’s *flail* :
And ‘mid these dancing *rocks* at once and ever

It flung up momently the sacred river. （12-24.）

だが、おお！あの深いロマンティックな岩狭間よ、
杉の森を横切って緑の丘の方に流れていた！
荒涼たる場所だ！その神聖さと怪奇さは、
かつて欠けてゆく月の下で、
魔性の恋人に恋い焦がれた女が取り憑かれた場所のようだ！
この岩狭間から、逆巻きながら止むことなく、
まるでこの大地が激しく喘いで息をするように、
強大な湧き水が寸断なく押し出されていた。
その速やかに断続的に押し出る水のなかに
巨大なかけらが飛び撥ねる様は、霰のようだ。
あるいは、唐棹に打たれる籾殻のようだ。
これらの躍る岩くずは同時にまた絶えず、
間断なく岩狭間から聖なる河に注ぎ込まれた。

そのような楽園に『深いロマンティックな岩狭間』があるという。きわめて Exoticism で原初的な Eroticism を想起させる風景である。それは夢の世界であり、無意識の宝庫となっている。あらゆる生命がここから誕生し、また生命あるものはすべてアルフ河に流され暗黙の海へと吸収されていく。宇宙的・無意識的根源の摂理が描かれていると言っても過言ではなかろう。

『杉の森』は、シンボル的には「不朽不滅」や「豊穣」を表し「王の尊厳」をすら示唆している。『緑の丘』の「緑」が示すシンボリックな意味は、多岐にわたることは周知のことではあるが、1.「母なる大地の豊穣、生命、自然」2.「復活、永遠、不滅」3.「中世では恋の芽生え」4.「ヘビ、短刀、男根」5.「羨望、嫉妬、毒→ヘビの色である」5.「憂鬱」6.「無知、

未熟、未経験」などを表す。[8] すなわち、『深いロマンティックな岩狭間』は、不朽不滅の豊かな森をぬけ、生命の根源である母なる大地向かって流れていた、とも読める。そのような情景は、『欠けてゆく月の下で、魔性の恋人に恋い焦がれた女が取り憑かれた場所』であるという。『ハムレット』では、月は亡霊の登場を表すこともあるし、この詩の場面のような三日月は、処女神を意味することもある。私見だが「魔性の恋人」とは、クライスト・ホスピタル時代に大失恋した初恋の乙女（Mary Evans）を想起させ、「恋焦がれた女」とは Coleridge 自身を想像させる。『クブラ・カーン』が書かれた 1797 年前後は、詩人としては最も想像力に満ちた作品が多く産出された時期ではあるが、一方では、リウマチ治療の阿片服用による体力の衰えや妻（Fricker）との仲違い、ワーズワス兄妹への羨望・嫉妬などが始まる時代でもある。このような詩人が渇望することはただ一つであり、それは永遠に枯渇することのない詩的想像力への果てしない願望ではなかったのか。

更には『強大な湧き水』（fountain）のイメージが創造されることになる。これはシンボル的には、冥界より湧き出るとされる「死・来世・誕生・再生」などを表し、「ユングでは枯れてしまったときに必要とされる『無意識の指令』を受け入れるところでもある」。[9] まさに寸断なく湧出する水（生命の源）と同時に岩くず（欠片）を聖なる河に間断なく注ぎ込んでいる。当然のような描写でありながら、風景としては不思議な光景でもある。「岩は神の象徴であり創造主の一面をもつ」。[10] たとえば宝石は「創造主の神的な本質が凝縮したものである」。まるで天地が創造される際の原風景のごとき描写だが、上述したように詩人にとっての詩的想像力への願望が強く意識されている風景であると思える。更に、詩は楽園を遠景から描く。

Five miles *meandering with a mazy motion*

Through wood and dale the sacred river ran,
Then reached the caverns measureless to man,
And sank in tumult to a lifeless ocean:
And ‘mid this tumult Kubla heard from far
Ancestral voices prophesying war !（25-30.）
蛇行に蛇行を重ねながら 5 マイル
聖なる河は森をぬけ谷間をわたり、
ようやく人間には測り知れない洞窟にいたり、
生物の棲まない海へと騒がしく沈んでいった。
この騒音のなかでクブラは、遠くから
戦争を予言する先祖たちの声を聞いた！

「聖なる河は 5 マイルも蛇行を繰り返しながら進み、洞窟を抜けて生物の棲まない海へと流れる」は、やがて訪れる楽園の喪失を予感させる。“Meandering with a mazy motion” は、悪魔としてのヘビを想像させるし、「生物の棲まない海」には、音も色も視覚も感性も何もない無の世界、すなわち無意識の世界を意味する。イブが悪魔に誘惑された如く、現生には絶対唯一の善や平和だけが謳歌する楽園（世界）など存在しない。
ここでクブラ・カーンは、未来に起こるであろう戦争を予言する声を聞く。これは即ち、権力者の没落と楽園の崩壊を予言させる声でもある。

The shadow of the dome of pleasure
Floated midway on the waves ;
Where was heard the mingled measure
From the fountain and the caves.
It was a miracle of rare device,
A sunny pleasure-dome with caves of ice!（31-36. ）

歓楽宮の影が
波の上、中ほどに浮いていた。
あの湧き出る泉や洞窟から
混じり合った調べが聞こえてきた。
それは、珍しいしかけの奇跡で
陽の光で輝く氷の洞をもつ歓楽宮だった。

歓楽宮 - それは氷の洞を併せもつ建築物であるという。氷は心理学では、意識と無意識の間を厳しく分かつ壁である。[11] ここでは、“shadow” と “sunny” の対比などからも意識と無意識の不可思議な世界であることを想起させる。この状況から突如と音楽が聞こえてくる。

A damsel with a dulcimer
In a vision once I saw:
It was an Abyssinian maid,
And on *her dulcimer* she played,
Singing of Mount Abora.
Could I revive within me
Her symphony and song,
To such a deep delight ‘twould win me.（37-44.）
私はかつて琴をもつ乙女の姿を
幻のなかで見たことがある。
それはアビシニアの乙女で
琴を奏で
アボラ山の歌を歌っていた。
もし私がその歌と調べを
蘇らせることができれば、

とても深い喜びに
囚われることであろう。

突然アビシニアの乙女が登場し、「琴を奏でアボラ山の歌を歌っていた」という。詩はここで最高の盛り上がりを見せ、詩人は詩的創造の絶頂に酔うことになる。この場面は、2 年前に書かれた “The Eolian Harp”（1795）の次の情景を想起させるのである。

Such *a soft floating witchery of sound*
As twilight Elfins make, when they at eve
Voyage on gentle gales *from Fairy-Land*,
Where *Melodies round honey-dropping flowers*
Footless and wild, like *birds of Paradise*,
Nor pause, nor perch, hovering on untam’d wing!（ 20-25. ）
それはまるで妖精たちが夜お伽の国から
穏やかな風に運ばれて旅する時に奏でる
魔法の音楽のようにやさしく漂う。
その快い調べ（音楽）は蜜を滴らす花のまわりを、
楽園の小鳥のように、自由奔放に
羽を広げ止まらず休みなく飛び回る。

これは「エオリア琴」が奏でる風情の様を比喩する描写の一部である。アビシニアの乙女が奏でる歌とその調べは、まさに楽園の音楽であり、選ばれし人のみがこれを享受できるのである。詩人 Coleridge にとってよき音楽こそ、その想像力とエネルギーが解き放され韻律巧みな創造性溢れる作品を生み出す根源でもあった。楽園で出会う乙女・音楽・花咲き乱れる風景・果樹園などは詩人にとっては、最高のエキスであった。しかし、前述

した如く、現実の生活はまるで違ったものと言ってよいだろう。終生リウマチ熱、頭痛、歯痛その他理由の判らない体全体の痛み等に苦悩し、2 週間から 4 週間寝室で静養することなど珍しいことではなかった。そのたびに阿片を服用したのであろう。詩は最終節に入る。

That with *music* loud and long,
I would build that dome in air,
That sunny dome! those caves of ice!
And all who heard should see them there,
And all should cry, Beware! Beware!
His *flashing* eyes, his floating hair!
Weave a circle round him thrice,
And close your eyes with holy dread,
For he on honey-dew hath fed,
And drunk the milk of Paradise.（45-54.）
私は高らかに長く鳴り響く音楽を聴いて、
中空にあの陽の光で輝く宮殿を建てるであろう！
氷の洞窟を！そこで、
音楽を聴く人は皆、それらを見て、
一斉に叫ぶであろう。「気をつけよ！気をつけよ！
彼のきらめく眼、彼の中空に漂う髪！
彼の周りに三度輪をつくり、
聖なる恐れをもって目をとじよ、
なぜなら、彼は甘露を食べ、
楽園の乳を飲んで育った人だから。

詩人は、「もしアボラ山の歌と調べを蘇らせる」ことができれば、「宮殿と

氷の洞窟」を建てたであろう、と歌う。が、急きょ「気をつけよ！気をつけよ！」と叫び、彼の人に対して「聖なる恐れをもって目をとじよ」と命じるのである。この「彼のきらめく眼」（His flashing eyes）とは、何者がもつ眼なのか。また、「甘露を食べ」、「楽園の乳を飲んだ人」とは、どのような事を意味するのだろうか。それは、まず『老水夫』（*The Rime of the Ancient Mariner*, 1797）の冒頭に謎解きのヒントが隠されているように思える。

It is an ancient Mariner,
And he stoppeth one of three.
‘By thy long grey beard and *glittering eye*,
Now wherefore stopp’st thou me?（1-4.）
老水夫がいた。
彼は三人の中の一人を呼びとどめて、
「その長く白い髭ときらめく眼もって
今なぜに私を呼び止めるのか？

突然に一人の老水夫がやって来て、婚姻の客の若者を呼びとどめる名場面である。若者は、ただ無礼千万な老人だと思うのであるが、この “glittering eye” に捕らわれて身動きできず、老水夫の物語を聞かざるを得ないのである。Coleridge の場合、この眼の光は詩人がもつ想像力の象徴の一つである。この後、物語は老水夫の苦難と懺悔と信仰の話が延々と続く。大事な点は、『老水夫』の苦難とその苦難を経て信仰を得る物語自体が Coleridge 自身の私的体験と類似している事である。これは彼の詩作品には自己体験の多くが描写されている故に告白詩人（Confession poet）と称されている事実からも窺い知ることができよう。[12]

従って、『クブラ・カーン』の最終節における「彼のきらめく眼」と

は、詩的想像力の永遠を願望する＜詩人の姿＞そのものではないだろうか。また「甘露を食べ」・「楽園の乳を飲んで育った」とは、まさに詩人自身が肉体的に唯一癒されることができた阿片そのものであることを想像させる。「気をつけよ！気をつけよ！」とは、クブラ・カーンも未来に起きるであろう戦争＝崩壊の予言を聞いた事と同じく、詩人もまた今後の労苦＝詩的想像力が枯渇する予言に関して示唆しているのではないか。これはまさに詩人の抑圧された願望が夢の形で「宮殿と氷の洞窟」を建設することになったが、一方で無意識的にはその崩壊と将来的苦難・労苦を予言している、という事が言える。『クブラ・カーン』は未完の作品と言われているが、見事に完結されていると思える。

さてユングは、夢も劇的構成をもつことを重要視した。即ち、夢も劇と同じく（1）場面の提示（2）その発展（3）クライマックス（4）結末の4段階に分けることができる[13]と言ったが、『クブラ・カーン』は夢物語としては、そのセオリー通りの作品と言える。

Ⅲ

Coleridgeのもう一つの仕事は眠ることであった。即ち、詩人として作品の概念あるいは発想（第一次想像力⇒Fancy）の着眼を得る力は、阿片服用による半睡時幻覚に依存する部分が大きかったのではないか。様々な悪夢、快楽夢に侵された詩人にとって、「眠る（或いは眠れる）」ことこそ幸福であり、そこは想像力の宝庫でもあった。

> It is but seldom that I raise & spiritualize my intellect to this height---& at other times I adopt the Brahman Creed, & say---It is better to sit than to stand, it is better to lie than to sit, it is better to sleep than to wake---but *Death is the best of all*!---I should much wish, like the Indian Vishna,

> [Vishnu] to float about along an infinite ocean cradled in the flower of the Lotos, & wake once in a million years for a few minutes---just to know that I was going to sleep a million years more.[14]

Coleridge は、『時々、バラモン教の信条をとりいれます。それは、立つことより座ることのほうが良く、座ることより寝ていることのほうが良く、目を覚ましているより眠っているほうが良い。その中でも、死が一番良い』と語る。慢性的な激痛と闘う人間にとって、眠りにつくことほど安楽なことはなかろう。更に続けて、『インドのヴィシュナのように、蓮の花に揺られて無限の大海を浮遊し、百万年に一度数分間、目を覚ますだけでよい』と言う。彼の究極的な願望がここに集約されているものと思われる。この詩人が上述した『告白詩人』と呼ばれる理由もまた、自己の過去や生活・自己の恋愛を現実感をもって赤裸々にうたう詩人という意味合いばかりでなく、赤裸々な内面心理、或いは不可解に点在する深層的願望を（第二次想像力⇒ Imagination）によってひとつに纏め上げ、言葉で表現し、芸術作品として完成させたという点において意義深い。

さて、「立つことより座ることのほうが良く、座ることより寝ていることのほうが良く、目を覚ましているより眠っているほうが良い。その中でも、死が一番良い」に注目する。『老水夫』では眠りについて、

> Oh sleep! it is a gentle thing,
> Beloved from pole to pole!
> To Mary Queen the praise be given!
> She sent the gentle sleep from Heaven,
> That slid into my soul.　（V, 291-95）
> ああ、眠りよ。それは優しい姿
> すべての人々に愛される！

聖母マリア様に感謝あれ！
彼女が楽園からその優しい眠りを届け、
それが私の魂に入り込んだ。

と描き、その大切さは老水夫（詩人自身）ばかりでなく万人共通のものだという。老水夫は「眠り」を与えられることによって三日月に祈ることができ、海を泳ぐヘビの姿をした穢れたものすら祝福できたのである。これは即ち、再生へと導き、老水夫は母国に帰還できることになった。しかしながら重要なのは、『眠り』より大切な『死』が存在する。

Coleridge にとって永遠とは何か。現世においては、クブラ・カーンの巨大権力も儚く散るしか術がない。現世においては、肉体的苦痛・病気・嫉妬・虚栄・不安・恐怖・不幸などに苦しめられるばかりだ。永遠に安心できる場所は、生命の向こう側にこそ実在する、と詩人は考えたのではないか。但し、詩的創造力の宝庫である無意識の世界の中に。

Coleridge の本質は、次の言葉で集約されるものと思える。『人生は真実の夢幻であり、悪であり、苦悩であり、蝕まれた墓であり、夢の形である』（“Life is a vision shadowy of Truth,/ And vice, and anguish, and the wormy grave,/ Shapes of a dream!”）[15] と言う事ではないか。

Notes

＊本文中の詩は、*The Complete Poetical Works of Samuel Taylor Coleridge*, ed. Ernest　Hartley Coleridge (Oxford: The Clarendon Press, 1912) からの引用による。

1　*Collected Letters of Samuel Taylor Coleridge*, ed. E.L.Griggs (Oxford: The Clarendon Press, 1956), pp. 347-48. 尚、引用文中のイタリックは筆者による。

2　*Ibid*., p.18.

3　Molly Lefebure, *Samuel Taylor Coleridge: A Bondage of Opium* (London: Quartet

Book, 1974), p.63. 参照。

4 Griggs, p. 394.

5 *Ibid.*, p.188.

6 *Ibid.*, p.276.

7 アト・ド・フリース『イメージ・シンボル事典』（東京：大修館書店、1984）p.114. 参照。

8 *Ibid.*, p.115. 参照。

9 *Ibid.*, p.262. 参照。

10 *Ibid.*, p.606. 参照。

11 *Ibid.*, p.354. 参照。

12 「告白詩人」の原点は Coleridge の生い立ちに起因する。愛情に飢えた Coleridge は「孤児意識」('orphan complex') を強く抱いた。基本的には、この「孤児意識」が Huttinson 婦人に対しては「母親の愛情」('maternal love') へと進展し、Wordsworth 兄妹や Thomas Poole や Robert Southy には「友情」('friendship') へとひろがり、家族に対しては「家族愛」('domestic love') として彼が切望するものである。Anthony John Harding はこれを「人間中心のヒューマニズム」('a man-centred humanism') と定義した。Coleridge は、『書簡集』の至るところで愛情の必要性を説いたのである。幼少年期に形成されたこの「孤児意識」こそ、詩作する時の潜在意識として流れていたのではないか。たとえば、「老水夫」のなかで、次のような表現を見つけることができる。

An orphan's curse would drag to hell
A spirit from on high;
But oh! More horrible than that
Is the curse in a dead man's eye!
Seven days, seven nights, I saw that curse,
And yet I could not die. (Part IV, 257-62)

彼の詩の多くには、体験から得た表現が多用される。

13 河合隼雄『ユング心理学入門』（東京：培風館、1979）、p.85. 参照。

14 Griggs, p.350.

15 *Religious Musings*, 414-16.

独創的な二度ものかたり：
マップル神父の説教と「ヨナ書」について

横　田　和　憲

“Now the Lord had prepared a great fish to swallow up Jonah
（さてエホバすでに大いなる魚を備えおきて
ヨナを呑ましめたまえり）*Jonah* 1: 17”
—— “Extracts（落穂集）, Melville, *Moby-Dick*, xviii”

序

メルヴィル（Herman Melville（1819~1891））が＜独創的な二度ものかたり＞を駆使する手法には目を見張るものがある。例えば、メルヴィルがその小説の筆を折ることになる『信用詐欺師（*The Confidence-Man*, 1857 ）』の第 26~28 章において繰り広げられる、イリノイ州の弁護士ホール（James Hall（1793~1868））の手になる “Indian Hating.—Some of the Sources of This Animosity.—Brief Account of Col. Moredock.” *Sketches of History, Life, and Manners, in the West*（Philadelphia: Harrison Hall, 1835）, volume 2, chapter 6, 74-82）からの長文に亘る引用においても、メルヴィル流に改変していく手法は顕著に見られる。本稿では、鯨を絆として、旧約聖書の「ヨナ書（“JONAH: *Jonah's mission to Nineveh*”）」[1] と『白鯨』（*Moby-Dick*, 1851）[2] 第９章を中心とした数章に的を絞り、メルヴィルが繰り広げる＜独創的な二度ものかたり＞を解明しながら、その核となる「真実の捉え難さ」を究明してみたい。各人、各組織それぞれの価値観に基づく善悪に絡んだ「真実」、それぞれが主張する「真実」の実体という論点はさておき、本稿で

は＜心の奥底に潜む多種多様な歪さ＞に的を絞り、真偽の見極め難さついて考察する。

1

『白鯨』と聖書との関わりが深いことは周知の事実である。ピークォッド（Pequod）号の船長エーハブ（Ahab [列王記（上）]）や、ただ独り生き延びることとなる語り手イシュマエル（Ishmael [創世記／列王記　（下）／エレミヤ書]）などはもちろん、マップル神父（Father Mapple）の説教との関連を踏まえながら、古くは William Braswell の *Melville's Religious Thought*（Octagon Books, 1973 [the Duke UP, 1943]）、Nathalia Wright　の *Melville's Use of the Bible*（Octagon Books, 1974 [the Duke UP, 1949]）、Ronald Mason の *The Spirit Above the Dust*（PAUL P. APPEL, 1951; 1972）や、Alan Lebowitz の *Progress Into Silence*（Indiana UP, 1970）から、最近の John Bryant, et al. ed. の *"Ungraspable Phantom"*（The Kent State UP, 2006）　や Jamie Lorentzen の *Sober Cannibals, Drunken Christians*（Mercer UP, 2010）を始め、様々な研究がなされて来ている。

『白鯨』第 32 章「鯨学（"Cetology"）」で、メルヴィルが自らの体験も含めて、鯨に関する考察を繰り広げていることも周知の事実だ。マッコウ（Sperm）、セミ（Right）、ナガス（Fin-back）、ザトウ（Hump Back）など主な種類だけでも多様な鯨であるが、分類としては歯の有無が決め手となる。抹香鯨モービィ・ディックは有歯である。建国から独立を経て世界的な地位を築き上げるまでのアメリカを支えたのは捕鯨であった。捕鯨に血道を上げたのはアメリカだけではない。この時代、欧米列強が鯨油を求めて凌ぎを削った。1853 年に浦賀に来航した Matthew Calbraith Perry（1794-1858）の主要な任務も捕鯨に関するアメリカの国策の一環だった。ピークォッド号が、後で述べる、5 番目のギャム（捕鯨船間での交歓）[3] として『薔薇の蕾み』号と邂逅した直後の第 92 章 "Ambergris" では、商品的価値

の高い竜涎香について、いつもの辛口も添えながら説明している。もちろん、エーハブがその追求に邁進する対象は、心の奥底に潜む歪さの根源を象徴する抹香鯨モービィ・ディックである。

『白鯨』の第 7（“The Chapel”）、8（“The Pulpit”）、9（“The Sermon”）章では、イシュマエルと銛打ちのクウィークェッグ（Queequeg）が、捕鯨航に臨む前に訪れた教会での情景が描かれている。この教会は、現在でもニューベッドフォード（New Bedford）に存在する、説教壇が舳先の形をした Seamen’s Bethel（海員礼拝所）としての “a Whaleman’s Chapel”（34）である。この教会の建立の経緯についての詳細は本稿では省くが、第 9 章での主役は、銛打ちの経験もあるマップル神父。全編 135 章に及ぶ長い航海において、ピークォッド号は他の捕鯨船と 9 度に亘るギャムとして邂逅し、モービィ・ディックに関する情報を収集する。米（1st：*Albatross* [*Goney*]、2nd：*Town Ho*、3rd：*Jeroboam*、7th：*Bachelor*、8th：*Rachel*［2 度目の出現となる作品最後の “Epilogue” で、ピークォッド号の沈没に際し、語り手イシュマエルを救出］、9th：*Delight*）・独（4th：*Virgin* [*Jungfrau*]）・仏（5th：*Rose Bud* [*Bouton de Rose*]）・英（6th：*Samuel Enderby*）である。エーハブは本来、社交を目的とするギャムなる場を、モービィ・ディックに関する情報収集の場に変えてしまう。個人的な目標を追求するエゴイスッティックなエーハブにとって、人との繋がりなど、眼中には無い。マップル神父（Mapple [=Map/Apple とも解せる]）の説教は、守護聖人 St. Elmo の加護も味方にしたエーハブの執拗な追跡の果てに、巨大な白い鯨モービィ・ディックに船もろとも叩きのめされ、南海の赤道あたりで海の藻屑と消え去る航海に先立つ、真偽の見極め難さに関わる意義深い説教である。

19 世紀の前半は、アメリカ文学が最初に開花した、「アメリカン・ルネサンス」と呼ばれる時代でもある。1803 年に、第 3 代トマス・ジェファスン大統領が、フランスのナポレオンから広大なルイジアナ地方を購入し、国土・国力ともに上昇の一途を辿った、確信に満ちたアメリカの最初の最

盛期であった。しかし同時に、人間存在の理想を希求したアメリカに “the ultimate mockery”（Irving Howe, “The Note of Wonder in American Writing,” *Dialogue* [The New York Times Co., 1976]）という、当時から指摘されている「窮極のお笑い」でしかない奴隷制度が頑として存在するネガティヴな側面を抱えてもいた時代でもある。メルヴィルという作家は、どちらかと言えばアメリカの否定的な側面を、文学としてデフォルメし、抉り出して来た。下降し続け、旧約聖書のヨナのように「海の深き渕（“the midst of the seas”（47）」にまで沈潜し、あるいは地獄の果てまで墜ち尽くすことも辞さないピエール（*Pierre, or the Ambiguity*（1852）の主人公）のような人物を描き出している。

2

説教の前段として無情感あふれる賛美歌を口にした後、マップル神父は言葉どおり、「ヨナ書」第 1 章の終わりの節、本稿の冒頭に引いたエピグラフの文言から説教を始める。「ヨナ書」そのものは、それぞれが短い 4 つの章から構成されている、極めて簡潔な書である。主への不服従のため、ヨナは三日三晩、呑み込まれた大魚の腹の内で悔い改め、主に救われて再び丘に上がり、主の命に従ってニネベに赴くことになる。だがニネベでの「とうごまの木（gourd）」に関わる教訓を物語る「ヨナ書」の 3 章と 4 章をメルヴィルは省いている。メルヴィルは「ヨナ書」の、17 節から成る第 1 章と 10 節から成る第 2 章を核にして、大幅な加筆を施しながら『白鯨』第 9 章として＜かたり＞直している。

メルヴィルは、『白鯨』第９章でマップル神父に、この説教の第 2 の要点についてこう語らせている。“Shipmates, it is a two-stranded lesson; a lesson to us all as sinful men, and a lesson to me as a pilot of the living God.”（42）。説教が罪ある者としての会衆一人ひとりへの教訓とともに、生ける神の水先案内人としての自らへの教訓を意識していると述べ、さらにこう続

ける。“As sinful men, it [the book of Jonah] is a lesson to us all, because it is a story of the sin, hard-heartedness, suddenly awakened fears, the swift punishment, repentance, prayers, and finally the deliverance and joy of Jonah.”（42）。神父は「ヨナ書」が罪、無慈悲、恐れ、懲罰、悔恨、神への祈り、そして主の最終的な救いによるヨナの歓びから構成されていることを確認する。

「ヨナ書」第 2 章の冒頭の句「ヨナは魚の腹の中から自分の神、主に祈りをささげて、言った。」に導かれる懺悔の詩の位置は、『白鯨』第 9 章では冒頭部に移されている。また「ヨナ書」第 2 章の最終の句「主が命じられると、魚はヨナを陸地に吐き出した。」[4] については、『白鯨』第 83（“Jonah Historically Regarded”）章で言及されている。だが基本的には「ヨナ書」の展開に沿って神父の説教は進められている。＜独創的な二度ものかたり＞として加筆が施されている箇所を検討するため、「ヨナ書」第 1 章の各節ごとに、『白鯨』第 9 章との対応関係を精査する。

1: 1-3　主の言葉がアミタイ（Amittai）の子ヨナに臨んだ。「さあ、大いなる都ニネベに行ってこれによびかけよ。彼らの悪はわたしの前に届いている。」しかしヨナは主から逃れようとしてタルシシュ（Tarshish；現在のカディス［Cadiz］）に向かった。＊メルヴィルはヨナの不服従について “But all the things that God would have us do are hard for us to do—remember that—and hence, he oftener commands us than endeavors to persuade. And if we obey God, we must disobey ourselves; and it is in this disobeying ourselves, wherein the hardness of obeying God consists.”（42-43）と、神に服従することの辛さについて、人間目線からの源を付け加える。この不服従については、後述する、第 9 章の後半つまりマップル神父による第 2 の説教において言及される。

1: 3-4　ヤッファ（Joppa）に下ると、折よくタルシシュ行きの船が見つかったので、船賃を払って乗り込み、人々に紛れ込んで主から逃れようと、タルシシュに向かった。＊ここでメルヴィルは、船おさの人物描写と

ともに、ヤッファからタルシシュに向かう船中の、牢獄にも等しい小部屋に幽閉されることになるヨナの心情を、真実の捉え難さに関連づけながら“Screwed at its axis against the side, a swinging lamp slightly oscillates in Jonah’s room; and the ship, heeling over towards the wharf with the weight of the last bales received, the lamp, flame and all, though in slight motion, still maintains a permanent obliquity with reference to the room; though, in truth, infallibly straight itself, it but made obvious the false, lying levels among which it hung.”（44-45 下線は筆者）と大幅な加筆を施す。さらに続けてランプにまつわる真偽とヨナの心情が描かれる。

> The lamp alarms and frightens Jonah; at lying in his berth his tormented eyes roll round the place, and this thus far successful fugitive finds no refuge for his restless glance. But that contradiction in the lamp more and more appals him. The floor, the ceiling, and the side, are all awry. ‘Oh! So my conscience hangs in me!’ he groans, ‘straight upward, so it burns; but the chambers of my soul are all in crookedness.（loc. cit. 下線は筆者）

ヨナが幽閉されるこの小部屋は、ヨナを呑み込むことになる鯨の腹の内部を伏線として、象徴的に暗示されている。

1: 5 主は大風を海に向かって放たれたので、海は大荒れとなり、船は今にも砕けんばかりとなった。船乗りたちは恐怖に陥り、それぞれ自分の神に助けを求めて叫びをあげ、積み荷を海に投げ捨て、船を少しでも軽くしようとした。＊『白鯨』の第 9 章でも、ほぼ、これを踏襲する。1:5-6 しかし、ヨナは船底に降りて横になり、ぐっすりと寝込んでいた。船おさはヨナのところに来て言った。「寝ているとは何事か。さあ、起きてあなたの神を呼べ。神が気づいて助けてくれるかもしれない。」＊ここも踏襲。1:7 さて、人々は互いに言った。「さあ、くじを引こう。誰のせいで、我々

にこの災難がふりかかたのか、はっきりさせよう。」＊『白鯨』の第 9 章でもこのとおり展開していく。

1: 8-16 で、くじを引いたヨナの告白と、船員たちとの遣り取りが述べられた後、ヨナは海に投げ込まれ、海は静まる。そして、本稿エピグラフの文言（さてエホバすでに大いなる魚を備えおきてヨナを呑ましめたまえり）と、その後に続くヨナの三日三晩に亘る懺悔の詩と、主による救いが記述される。ここでは「ヨナ書 1:17（第 1 章の最終節）」（Ebor 1124）からの原文を付しておく。“But the LORD ordained that a great fish[5] should swallow Jonah, and for three days and three nights he remained in its belly.” この記述を基に、自らの罪を認めつつも神を仰ぐヨナの姿をメルヴィルは、会衆に向かうマップル神父の説教に反映させながらこう締めくくる。“Shipmates, I do not place Jonah before you to be copied for his sin but I do place him before you as a model for repentance. Sin not; but if you do, take heed to repent of it like Jonah.”（47）。

だが実は、先に “a lesson to me [Father Mapple] as a pilot of the living God.”（42）として独創的に書き加えた第 2 の説教こそが、メルヴィルの真骨頂なのだ。ヨナに関わるもう一つの教訓を “… that other and more awful lesson which Jonah teaches to *me*, as a pilot of the living God.”（47）と述べた後、神父は会衆に向かって主へのヨナの不服従の内実を詳細に繰り返し、呑み込まれたヨナの懺悔、そして「ヨナ書」第 2 章の最終節 10 で「主が命じられると、魚はヨナを陸地に吐き出した」と記述されるヨナの救いを語る。

> I have read ye by what murky light may be mine the lesson that Jonah teaches to all sinners; and therefore to ye, and still more to me, for I am a greater sinner than ye. … How being an anointed pilot-prophet, or speaker of true things, and bidden by the Lord to sound those unwelcome truths in the ears of a wicked Nineveh, Jonah, appalled at the hostility he should

> raise, fled from his mission, and sought to escape his duty and his God by taking ship at Joppa. But God is everywhere; Tarshish he never reached. As we have seen, God came upon him in the whale … .（47; 下線は筆者）

そして “… Jonah did the Almighty’s bidding. And what was that, shipmates? To preach the Truth to the face of Falsehood! That was it!”（48）と、偽りの仮面の背後に潜む真実、捉えることが至難の業である真実を追求し、知らしめることこそが､生ける神の水先案内人としての自らの使命であると結ぶ。心の闇を直視せよ、と信者に説くことに自らの使命があるのだ、とマップル神父は説教を締めくくっているのである。マップル神父とは、罪あるいは悪の象徴であるアップル（林檎）の味を知る者であり、神の水先案内人として、マップ（地図）を携え、会衆を「心の闇」の根源へと誘うことを使命とする者なのだ。

神父が説く真実とは、一つには、心の奥底に潜む歪な闇である。“Woe to”（48）というフレーズで導かれる歪さが、禍いとして、こう列挙される。

> … woe to that pilot of the living God who slights it. Woe to him whom this world charms from Gospel duty! Woe to him who seeks to pour oil upon the waters when God has brewed them into a gale! Woe to him who seeks to please rather than to appal! Woe to him whose good name is more to him than goodness! Woe to him who, in this world, courts not dishonor! Woe to him who would not be true, even though to be false were salvation! Yea, woe to him who, as the great Pilot Paul has it, while preaching to others is himself a castaway!”（48）

心の奥底に潜む多種多様で歪な闇に果てしは無い。

3

この捉え難さ、あるいは、真実はすべて深遠なものであることを、エーハブの心の深層を解明しようと試みる第 41（“Moby Dick”）章で、メルヴィルはイシュマエルに “But vain to popularize profundities, and all truth is profound.”（185）と述べさせている。深遠なる真実を明確に捉えることは至難の業なのだ。一つには実体が垣間にも見えづらいからだ。メルヴィルは書評の形で書いたエッセイ「ホーソーンとその苔（“Hawthorne and His Mosses”）」（1850）の中で、捉え難い真実を＜白い雌鹿（a scared/sacred white doe）＞に準えている。虚偽に満ちた現世では、真実はまるで森を逃げ惑う＜脅えた／聖なる白い雌鹿＞のように、一瞬その姿を垣間見せるだけだ。真実は密やかに、しかも瞬時にしか、その姿を現さないのである。

真実の捉え難さをメルヴィルは、さらに、実体に内在する曖昧さの故であるとして、幾つかの具体的なイメージでもって、『白鯨』の冒頭から示唆している。第 1 章の章題 “Loomings” は、一般的には、「幻のように何かが＜ぼんやり＞と不気味に大きく見えて来る様」を示す語である。『白鯨』においては、遥か沖合に不明瞭に見える対象物、つまり章の最後で “ … midmost of them [endless processions of the whale] all, one grand hooded phantom[6], like a snow hill in the air.”（7）と記されている白鯨モービィ・ディックを示唆している。“Loomings” が示唆しているのは曖昧性なのだ。作品全体を通して、話法の多くが二重否定の推測的な文体になっているのは、この曖昧性を強調するためである。

第 1 章では、人はなぜ水魔に誘われるのかを説きながら、メルヴィルはナルキッソスの故事を “… Surely all this is not without meaning. And still deeper the meaning of that story of Narcissus, who because he could not grasp the tormenting, mild image he saw in the fountain, plunged into it and was drowned.”（5）と二重否定の文体で語る。ナルキッソスは泉に映るおのれの悩殺的で、

はかない像を捉えようとして苦闘し、ついにわれとわが身を投げ入れ溺れて果てることになる。だが原典のギリシア神話はこう記述している。妖精エコーへの無視という罪を購うために、水面に映る自分の姿を、それが自分とは知らずに見惚れるうち、みるみる窶れていき、水辺で息絶え、水仙に姿を変える、と。重要なのは、溺死か衰弱死かということではなく、水鏡に映し出されるイメージ（似姿）に魔力を帯びた魂の奥底をさぐろうとするナルキッソスの行為である。心の奥底に潜む何か一つの歪さが表出されているのかも知れない。掴もうとすればするほど曖昧さを増し続ける実体は捉え難い。

さらに、イシュマエルにとってモービィ・ディックとは何かを説く第42（“The Whiteness of the Whale”）章では、白という色について論が展開される。青でも赤でも緑でもなく、なぜ、メルヴィルは白という色に固執しなければならなかったのだろうか。香わしさ、誉れ、気高さなど、様々な概念と白を結びつけた後で、こう、留めを刺す。“… yet for all these accumulated associations, with whatever is sweet, and honorable, and sublime, there yet lurks <u>an elusive something</u> in the innermost idea of this hue, which strikes more of panic to the soul than that redness which affrights in blood.”（189 下線は筆者）。白という色に対する理念の深層のどこかに、何か、それでも＜曖昧なもの＞が存在する。白という色を分析し、定義し、あるいは白に関する理念を構築してみても、それでもやはり、どこか捉え難いもの、極めて曖昧なもの、変貌自在で理解し難いもの、人間の能力が及ばないものが存在し、白に対する漠たる不安が生じるのだ。いや不安どころか、白という色は、暴力を連想させる深紅の血よりも強烈な暴力性を帯びた色として恐怖感すら喚起するのである。

第 42 章には “terror”、“pallor”、“dread” など恐怖を表す語が鏤められている。『白鯨』第 9 章ではマップル神父が第 2 の説教として “… on the starboard hand of every woe, there is a sure delight; and higher the top of

that delight, than the bottom of the woe is deep.”（48）と説くが、第 42 章では “Though in many of its aspects this visible world seems formed in love, the invisible spheres were formed in fright.”（195）と、可視の世界の＜愛＞よりも、不可視の領域の＜恐怖＞の方が強調されている。第 42 章の最終節では “… in essence whiteness is not so much a color as the visible absence of color, and at the same time the concrete of all colors …”（195）と、白の本質は色というよりは色の可視的な欠如の状態なのであり、同時に一切の色の集積なのだと述べる。白という色の本質は、曖昧、なのである。

結

メルヴィルは「ヨナ書」を独創的に語り直しながら、マップル神父の、真偽の見極め難さに関わる意義深い説教を創作した。本稿では＜心の奥底に潜む多種多様な歪さ＞に的を絞り、真偽の見極め難さについて考察してみた。『白鯨』第 9 章の最後はこう描写されている。すべての会衆が去った教会で独り跪き両手で顔をおおうマップル神父は、「ヨナ書」を核にした独自の説教を “… what is man that he should live out the lifetime of his God?”（48）という記述で締めくくる。人が、もし、自らの神と同じ命のきわまでも生きるというのなら、人間とはいったい何なのだろうかという根源的な問いかけである。流離（さすらい）の、ただ、一言。文学とは逸脱なのだという簡潔にして奥深い洞察がある。その文学を研究・探求する意義については、舌津智之氏の「あらゆる真摯な言語的探求とは、自らに欠けた／失われた何かを探し求めるいとなみである。」（『英語青年』（2005 年 4 月）、p. 4）という貴重な示唆もある。

『白鯨』を締めくくる “Epilogue” で言及されている、罰として火の車輪につながれて永遠に回転し続ける、ギリシア神話のイクシオン（Ixion）の流転は、一人だけ生還することになる語り手イシュマエルの放浪にも、意味深く重なる。沈黙の白鯨モービィ・ディックは、究極的に、心の奥底

に潜む多種多様な歪さを象徴している。この白鯨に挑んで滅ぶエーハブは、人間であれば誰もが携えている、傲慢という本質的な歪さを体現しているのかも知れない。白鯨は、その白さ故、そしてその巨体の故に、神格化されている。エーハブは神と同一視される鯨を、神にはなれない生身の人間として立ち向かう。神に見紛うとはいえ白鯨の体躯は歪んで醜い。なぜなら白鯨の醜さはエーハブの心の歪さを象徴しているからだ。さらに、白鯨の醜さは、神への挑戦も厭わない傲慢なるエーハブの醜さを代理表象している。醜いエーハブが醜い白鯨に挑む。これは自己の醜さを取り除き、己の罪を浄化しようとするピューリタンの究極的な幻想の成す業である。それが、虚しくも壮絶な闘いとなることは、火を見るより明らかだ。なぜなら、白鯨への攻撃は畢竟、エーハブにとっての自滅行為に他ならないからである。

真偽の見極めへのメルヴィルの固執は、メルヴィルが描く一人の代表的な人物像である「信用詐欺師（Confidence man, Conman）」として、さらなる展開を見せることになる。実際には極めて残酷な詐欺劇なのだが、信用詐欺劇の背後では、常に満面に笑みを浮かべ、あちらこちらに、巧妙な罠を仕掛け続ける歪な悪魔さまが暗躍する。巧妙な罠により、真実は、ますます曖昧化される。真実の実体は、入れ子の形で何重にも巧妙かつ複雑に包み込まれる形で、さらに曖昧になるのだ。真偽の見極めを不能にするこの曖昧さの正体を暴こうと必死になって追い詰める真摯な探求者たちを、するりするりと永遠にすり抜け続ける存在が、白く巨大で歪な鯨モービィ・ディックなのである。

Notes

1　聖書からの引用（邦訳）は「日本聖書協会による新共同訳 (1991)」による。『白

鯨』第 9 章の記述を踏まえ、聖書（英訳）内の章、節に関する本稿での記述は Donald Ebor, ed., *The New English Bible* (Oxford: Oxford UP and Cambridge UP, 1970). による。金城学院大学の共通教育科目「文学とキリスト教」（オムニバス）での講義を基に本稿を執筆した。本稿の執筆に当たり、注 5 の「鯨」についての記述を始め、金城学院大学文学部宗教主事の落合建仁氏から多くの貴重な示唆を頂いた。

2 *Moby-Dick* からの引用は The Northwestern-Newberry Edition による。Herman Melville, *Moby-Dick or The Whale* (Evanston and Chicago: Northwestern UP and The Newberry Library, 1988). 以下、同書からの引用は、全て本文中に頁数のみを記載する。

3 メルヴィル自身による定義が、『白鯨』第 53 章で、こう記されている。" GAM. NOUN -- *A social meeting of two (or more) Whale-ships, generally on a cruising-ground; when, after exchanging hails, they exchange visits by boats' crews: the two captains remaining, for the time, on board of one ship, and the two chief mates on the other*." (240)

4 ヨナが吐き出された陸地の場所が何処なのか筆者は確定できないでいる。メルヴィルは "It was this, if I remember right: Jonah was swallowed by the whale in the Mediterranean Sea, and after three days he was vomited up <u>somewhere within three days' journey of Nineveh</u>, a city on the Tigris, very much more than three days' journey across from the nearest point of the Mediterranean coast." (365 下線は筆者) と述べている。11 に亘る貴重な既訳書の多くからも、下線部に関する＜ニネベへの「3 日」の旅程になる吐き出された場所＞が確定できない。「ヨナ書」の第 3 章第 3 節「ニネベは非常に大きな都で、一回りするのに三日かかった。」との混同か。これも今後の課題の一つにしたい。『白鯨』第 83 章はこの類推を刺激する。

5 聖書（新共同訳）における鯨への言及についてであるが「鯨」、「クジラ」、「くじら」での表記は見当たらない。例えばマタイ福音書 12: 40 では「大魚」と記されている：「つまり、ヨナが三日三晩、＜大魚＞の腹の中にいたように、人の子も三日三晩、大地の中にいることになる。」また、必ずしも「鯨」とは限らないかも知れないが、「レビヤタン」としても記されている。ヘブライ語「レビヤタン」とは、ヘブライ語「ラハブ」（海の怪物のこと。エジプト人の隠喩としても使われる。イザヤ書 30: 7、詩編 87: 4 など）やヘブライ語「タンニーン」（大蛇。詩編 91: 13 他、旧約では計 14 回でてくる）、「竜」と互換的な海の怪物のことである。ナイル鰐のイメージを担うレビヤタンは、ヨブ記作者の創

作だと推測される。ヨブ記 3: 8、同 40: 25（但し箇所はヨブ記 41: 1）、詩編 74: 14、同 104: 26、イザヤ書 27: 1 で確認できる。

6　この引用の前にも現れ、作品全体で十数回（1, 4, 38, 42, 48, 52, 54, 59, 69, 126, 135 の各章）も出現する妖怪メタファーである。*Webster* (2nd ed.) の定義では “An immaterial semblance, as a specter, a dream image, etc., or a fallacious appearance, as an optical illusion; a phantasm; an apparition.” となる。平たく言えば地上で見る「悪霊直観」のこと。これに関連して第 41 章の “He [Ahab] piled upon the whale’s white hump the sum of all the general rage and hate felt by his whole race from Adam down; …” (184) に付された坂下昇氏の訳注（国書刊行会［第七巻］、1982、(402)）が筆者の、別の検討課題となる。「アダム以来の人類の怒り。アポクリファ（外典）による＜人類の、神への反逆の系譜＞のこと。＜地獄に堕ちて永劫の死に悩むアダム＞に対してキリストが第二の死（＝魂の消滅）による再生を与えた。この不滅の魂に対する恐れ（悪霊直観という）に反抗する思想から、ついにはアダムが創造主に不服従をなした、という説は＜清教主義が克服せねばならぬ最大の矛盾＞だった」（＜　＞は筆者）。

SYNOPSIS

T. S. Eliot: ‘Wisdom of Humility’

Toshiko Kurahashi

This paper is written firstly, to clarify the meaning of Eliot’s ‘Wisdom of Humility.’ It is not just the translation of the word into Japanese but the translation which suggests Eliot’s religious and philosophical speculation deep in his mind.

Secondly, to prove that the basic and ethical virtue which man has, is common to all the people in the world, in spite of their race, nationality and the times.

The paper refers to T. S. Eliot and three of the Orient—Inazo Nitobe, Koshi and Kitaro Nishida.

SYNOPSIS

Reading *Joy Luck Club* through Jungian Depth Psychology

— In the Light of Psychological Stages of Woman's Development by Erich Neumann —

Minoru Morioka

Amy Tan's *The Joy Luck Club* is filled with compelling stories of four Chinese immigrant mothers and their American-born daughters. Tan presents how the healing power of forgiveness saves the troubled relationship between the Chinese mother and American daughter. Although the generational and intercultural differences generate the American daughter's inability to value her mother's Chinese story at first, each daughter gradually learns to reconcile with her mother by finding then unconditional love they shared between the daughter and her mother.

Among the American-born daughters, Jing-mei fills her departed mother's corner at the Joy Luck Club's mah-jong table, and then she finally can genuinely appreciate her mother's devotion and actions by seeing things from her mother's perspective. She is told that her mother, Suyuen Woo once left two babies in Shanghai, China, by her departed mother's friends, the members of the Joy Luck Club. A sense of reconciliation occurs when Jing-mei opens her heart and mind to really try to understand her mother's pain and loss from the past.

Like Jing-mei, other three American daughters forgive their mothers by being released from the victimized feeling of the mother-daughter traumatic past. Why does the forgiveness occur? As Erich Neumann, the psychologist who is the student of Carl Jung, describes in his book *The Fear of the Feminine*, the power of forgiveness derives from "the matriarchal consciousness" accompanied by "anima"

in the course of the individuation (the self-realization).

Now as the American daughter stands facing life from her mother's point of view, the daughter can live a happy and more successful life by accepting the differences between them. This attitude leads to the success of the intercultural understanding.

SYNOPSIS

Another Theme of Jane Austen: Human Health

Kazume Yutani

In the 18th century Europe, two very different literary movements were confronted; Neoclassicism and Romanticism. Besides it, from the late 18th century to the early 19th century, the Industrial Revolution began in Britain. It marks a major turning point in history; almost every aspect of daily life was influenced in some way.

Jane Austen was a comic novelist. Her first literary impulse was humorous; and to the end of her life humour was an integral part of her creative process. But on the other hand, she never sealed in the vast anguish of her time. She reveals people's suffering by way of the physical and mental disease belonging to people. She was concerned with ill health from her early days of juvenilia and continued to be so until the very last unfinished novel, *Sanditon*, though Austen dealt sickness with an object of ridicule. My aim in this paper is to reveal the cause of illness such as 'nerves' and 'hypochondria' which the characters in Jane Austen's novels often complain of.

SYNOPSIS

Reading *Kubla Khan*
— in Terms of Psychoanalytical Study —

Yasushi Kimura

It was *Kubla Khan* that Coleridge (Samuel Taylor Coleridge, 1772-1834) dreamt and composed in the summer of the year 1797. In consequence of indisposition he fell asleep in his chair in a farm house near Porlock in Somerset, England. On awaking he instantly and eagerly wrote down the lines 'In Xanadu did Kubla Khan / A stately pleasure-dome decree…' It consisted of 54 lines in total which was fairly short for a poem. At that time, it was sure that his health condition was very bad due to rheumatism, for that he often took opium by himself as treatment. He described his life and ideas in his poems and letters as his own experiences through boyhood being out of shape and suffering from the effects of opium. He was called 'Confession poet,' he confessed his hope, desire, agony or penitence in his many poems and other works. Also in *Kubla Khan* Coleridge made his ideal using symbolic diction in encompassing mood of dreamy enchantment. He noticed the man who had created 'a stately pleasure-dome' would have drawn ruin on himself in the near future through his unconsciousness because we are mortal. In the poem I tried to interpret his imaginative and dreamy wording into real meanings partly with a psychological, or psychoanalytical method.

SYNOPSIS

Creatively Twice-Told Narratives: On the Sermon of Father Mapple Based on *Jonah*

Kazunori Yokota

It is remarkable how Melville used his own literary method of the creatively twice-told narrative. In this paper we elucidate the intention of creatively twice-told narratives through the sermon of Father Mapple in chapter 9 of *Moby-Dick*, which is based on *Jonah* of the Old Testament.

Melville has Father Mapple say "Shipmates, it is a two-stranded lesson; a lesson to us all as sinful men, and a lesson to me as a pilot of the living God" (*Moby-Dick*, chapter 9). Melville creates this second lesson in order to emphasize the difficulty of grasping the Truth. Another instance of this difficulty is alluded to as a White Doe ("Hawthorne and His Mosses" (1850)). Regarding Truth, there is also a radical problem of faith in relation to what Truth is. This paper focuses on the aspect of Truth versus Falsehood. Things are not quite what they appear to be. Truth lies beneath the surface, with layers that are significant and complex. We come to know Truth as it is realized in the depths of various warped human hearts. Moby Dick the Whale symbolizes this warped human nature in a concentrated form, and, therefore, as its apotheosis, the White Whale must be eradicated, though the effort is in vain.

We also investigate the fundamental presence of elusiveness or ambiguity, which intensifies the difficulty of grasping Truth. Some images personifying this elusiveness are depicted in the fountain reflection of Narcisus (*Moby-Dick*, chapter 1), or Color White (*Moby-Dick*, chapter 42).

執筆者紹介

イギリス文学

（学術論文）倉橋　淑子　　元 昭和女子大学　教授

アメリカ文学

（学術論文）森岡　　稔　　愛知学院大学　非常勤講師

イギリス文学

（学術論文）湯谷　和女　　神戸女子大学　教授

イギリス文学

（学術論文）木村　保司　　園田学園女子大学　教授

アメリカ文学

（学術論文）横田　和憲　　金城学院大学　教授

サイコアナリティカル英文学協会
［1974（昭和49）年7月20日創立］

サイコアナリティカル英文学会
［1983（昭和58）年4月1日改称］

初代名誉会長　大槻　憲二
第２代名誉会長（初代会長）　今田　準造（創立者）

１．サイコアナリティカル英文学会
〒752－0997　山口県下関市前田2丁目27－43
会　　長：小園　敏幸　　℡　090－8297－0729
事務局長：藤見　直子　　℡　080－3978－1913
E-mail：psell.1974@gmail.com
ホームページ：psell.sakura.ne.jp

２．役　員［任期3年:2014（平成26）年4月1日～2017（平成29）年3月31日］
顧　　問：林　　暁雄
会　　長：小園　敏幸
副 会 長：木村　保司、倉橋　淑子
常任理事：金丸　千雪、木村　保司、倉橋　淑子、小園　敏幸、湯谷　和女、横田　和憲
理　　事：伊藤　太郎、金丸　千雪、木村　保司、倉橋　淑子、藤見　直子、小園　敏幸、鈴木　　孝、町田　哲司、湯谷　和女、横田　和憲
会計監査：有働　牧子、松尾かな子
運営委員：有吉登志子、石田美佐江、有働　牧子、金丸　千雪、藤見　直子、佐々木英哲、鈴木　　孝、中尾香代子、松尾かな子、湯谷　和女
論叢編集委員：飯田啓治朗、倉橋　淑子、小園　敏幸（編集長）、佐々木英哲
事務局長：藤見　直子

サイコアナリティカル英文学会会則

第１節　　総　則

第１条　本会は、サイコアナリティカル英文学会という。

第２条　本会は、本部を会長の本務校又は自宅に置く。
事務局については、別途理事会において決定する。

第２節　　目的と事業

第３条　本会は、精神分析学の立場から、英米の言語及び文学を研究することを目的とする。

第４条　本会は、前条の目的を達成するために、次の事業を行う。

１．学術研究会、講演会

２．会誌の発行

３．その他、本会の目的を達成するために必要な事業

第３節　　会　員

第５条　本会の会員は、次の通りとする。

１．本邦大学課程またはそれに準ずる教育をうけた者及び相当教育機関の在籍者で、本会の目的に賛同する者を会員とする。会員は維持会員および一般会員で構成する。維持会員は会員の中の有志とする。

２．本会に功績のあった者で会長が役員会に諮って推挙する者を名誉会員または賛助会員とする。

第６条　本会に入会を希望する者は、所定の申込書を事務局に提出し、理事会の承認を得なければならない。

第７条　会員は、本会の開催する学術研究会において研究発表をすることができる。

第８条　会員は所定の会費を納入しなければならない。
名誉会員は会費を納入することを要しない。

第９条　年会費は維持会員1万円（内、3,000円は寄付）、一般会員7,000円。
但し、大学院生は3,500円とする。

第10条　退会を希望する者は、退会願いを事務局に提出し、理事会の承認を得なければならない。

第４節　　運　営

第11条　本会には役員として会長1名、副会長2名、会計監査2名、常任理事、理事及び運営委員、論叢編集委員若干名を置く。
尚、名誉会長及び顧問を置くことができる。

第12条　（理事）　理事は会員の推挙により選出する。

第13条　（常任理事）　常任理事は理事の中から推挙により選出する。

第14条　（会長）　会長は常任理事の中から推挙により選出する。

第15条　（副会長）　副会長は会長が常任理事の中から選任する。

第16条　（運営委員）　運営委員は会員の中から推挙により選出する。

第17条　（会計監査）　会計監査は会員の中から推挙により選出する。但し、2名のうち少なくとも1名は理事を兼ねることができない。

第18条　（『論叢』編集委員）　『論叢』編集委員は会員の中から推挙により選出する。

第19条　（役員会）　会長は必要に応じ役員会を招集する。

第20条　（理事会）　会長は原則として年１回理事会を招集する。
会長は前項理事会に必要に応じ運営委員の出席を求めることができる。

第21条　（常任理事会）　会長は随時常任理事会を招集することができる。

会長は前項常任理事会に必要に応じ運営委員の出席を求めることができる。

常任理事会の決議事項は理事会の議を経て効力を発するものとする。

第22条　役員の任期は3年とし、重任を妨げない。

第23条　本会の経費は年会費、寄付金その他を以って賄う。

第24条　本会は年1回総会を開き、役員の決定、年会費の決定、事務会計の報告等を行う。総会に続いて、学術研究会を開催し、会員の研究業績の発表及び討議を行う。

第25条　本会則の変更は、理事会の審議を経て総会に提出され、総会出席者の3分の2以上の賛成を得なければならない。

補則　本会則は昭和49年7月20日より施行する。

昭和49年12月１日　第１回大会　改正
昭和51年12月５日　第３回大会　改正
昭和52年12月４日　第４回大会　改正
昭和53年12月３日　第５回大会　改正
昭和54年12月１日　第６回大会　改正
昭和55年12月６日　第７回大会　改正
昭和57年12月４日　第９回大会　改正
平成３年11月９日　第18回大会　改正
平成８年10月19日　第23回大会　改正
平成９年10月４日　第24回大会　改正
平成12年９月30日　第27回大会　改正
平成14年10月５日　第29回大会　改正
平成16年10月５日　第31回大会　改正
平成23年10月22日　第38回大会　改正

『サイコアナリティカル英文学論叢』
投　稿　規　定

1．投稿論文は未発表のものであること。ただし、口頭発表はその旨を明記すれば可。

2．内容は精神分析学の立場から、英米の言語及び文学を研究した論文であること。

3．応募者は本学会会員であること。

4．原稿（論文及び英文シノプシス､書評）は全て､パーソナルコンピューターによること。審査用として、プリントアウトしたものを４部（コピー可）提出し、英文によるシノプシス（200 語程度）４部を添付すること。（書評の場合には、英文シノプシスは不要である。）

論文の書き方の大枠については、次の通りである。

⑴　本文の後には、Notes の項目のみ設ける。Bibliography や Works Cited の項目は設けない。

⑵「注（註）」は Notes とする。

⑶　短い引用文（Two sentences 以下）の場合は、Double quotation marks（“　　”）でくくって、地の文の中に入れる。その出典が地の文の中に明示されていない場合には、closing mark（”）の右上肩に番号を打って、Notes の中で出典を明示する。

⑷　長い引用文は、地の文と区別し、indent し、この quotation と地の文との space は double space とする。

⑸　Notes には、次の略語を使用する。

ibid. . . . . .　同一著者の同一著作に連続して言及する時に用いる。

op. cit. . . .　著者 (surname) と page number は必ず示す。

loc. cit. . . .　同一著書の同一頁から連続して引用する場合にのみ用いる。

(6) シノプシスには英文のタイトルとローマ字による執筆者の氏名を記入すること。

5．原稿の採否および掲載の時期は編集委員会が決定する。

6．執筆者は編集委員から採用の連絡があり次第、電子メールによる添付ファイルにて原稿を事務局に送付すること。（またはフロッピーディスク、メモリースティック或いはＣＤ等による提出も可。）

7．採用論文の執筆者は論叢印刷費用の一部を負担する。詳細は内規による。

8．原稿の締め切りは９月末日とする（厳守のこと）。

9．論叢発行の際に、執筆者には抜刷 30 部が送られる。

付記

学会の依頼による執筆の場合は、この規定を適用しない。

この規定の他に、『サイコアナリティカル英文学論叢』に関する内規を別に定める。

サイコアナリティカル英文学会の図書出版に関する規定

本学会は「著作が精神分析学の立場から英米の言語や文学を研究している」場合に、執筆者の申し出により可能な限りのサポートをする。（執筆者は本学会会員であること。）

1．編集委員が著作の査読を行い、必要に応じて助言し、著作内容の一層の充実のために協力する。
2．印刷会社については原則として執筆者が直接交渉するものとするが要望があれば、紹介等の便宜をはかる。
3．完成本については、学会に献本するものとする。

編 集 後 記

編集長　小園敏幸

本学会が、創立 40 周年を迎え、『サイコアナリティカル英文学論叢　第 35 号』の発行に至ったことは、誠に喜ばしいことである。

顧みれば、1974（昭和 49）年 7 月 20 日に、今田準造先生がサイコアナリティカル英文学会を設立され、初代会長を 12 年間、第 2 代名誉会長を 5 年間されました。そして先生は、学会創立から 17 年後の 1991（平成 3）年 6 月 22 日に享年 93 歳でご他界されました。それから瞬く間に 23 年が過ぎ、因って本学会は今年度、即ち 2014 年 7 月 20 日に創立 40 周年を迎えたのである。この間に、本学会は小規模の学会ではあるが、『サイコアナリティカル英文学論叢』が平成 9 年郵政省告示第 315 号をもって平成 9 年 7 月 24 日付で学術刊行物として認定されました。更に、平成 20 年 12 月 25 日付で日本学術会議協力学術研究団体として指定されました。

その栄えある創立 40 周年を記念して、『英米文学の精神分析学的考察　第 3 巻』の出版に向けて現在準備中であるが、順調に進めば来年度中には出版可能である。執筆者は総勢 16 名で、総頁数は 400 頁くらいを予定している。

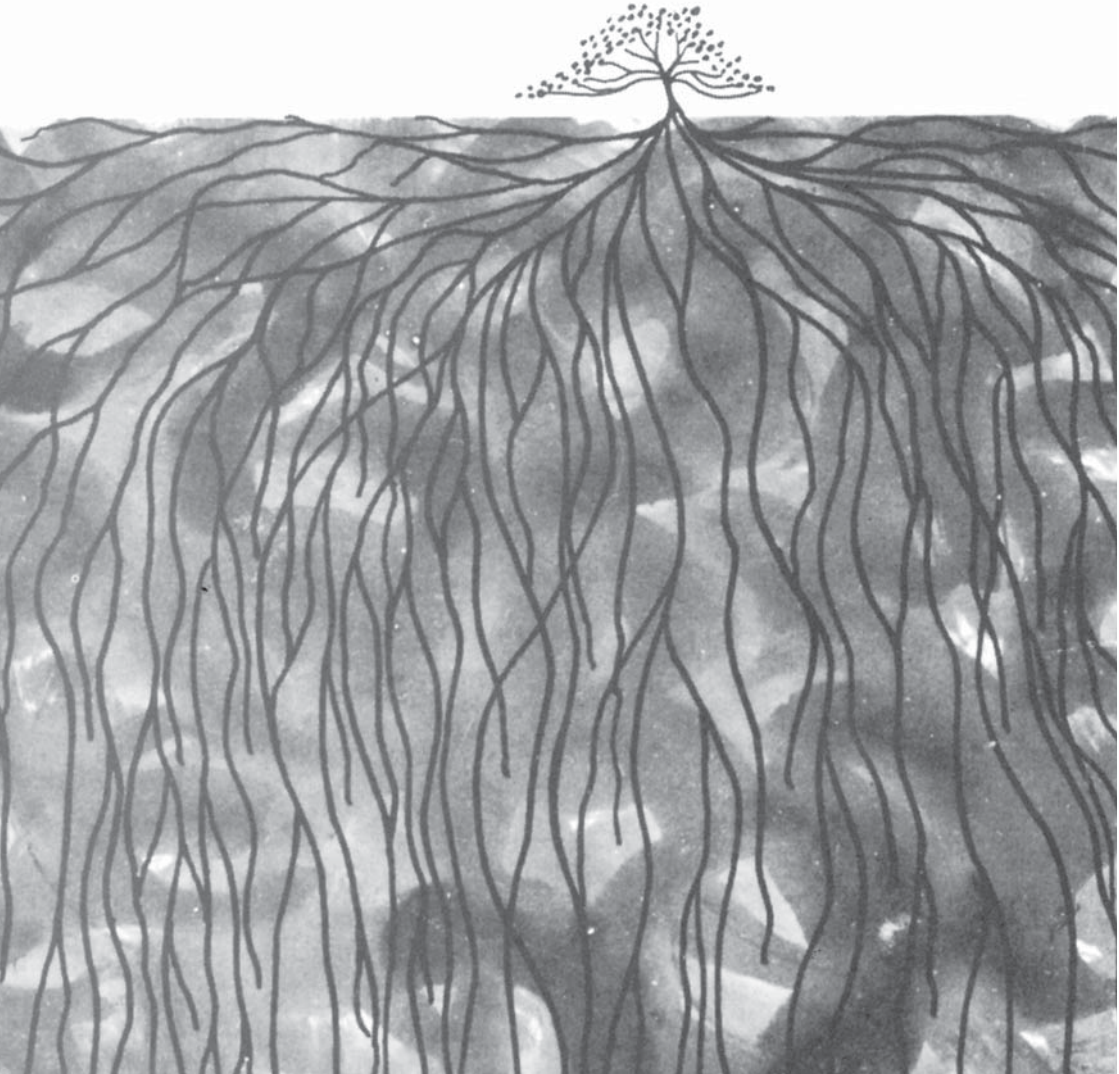
『サイコアナリティカル英文学論叢　第 35 号』の学術論文の執筆者は、掲載順に倉橋淑子先生（イギリス文学）、森岡稔先生（アメリカ文学）、湯谷和女先生（イギリス文学）、木村保司先生（イギリス文学）、横田和憲先生（アメリカ文学）の 5 名である。何れの論文も精神分析学の立場から文学を考察しており、独創的で読み応えのある重厚な出来栄えとなっている。査読については、「編集委員の 4 人（飯田啓治朗、倉橋淑子、佐々木英哲、小園敏幸）が各自、全投稿論文に総当たり」という当学会の査読の

鉄則に則り、編集委員は執筆者の論文の意図を汲み取りつつ、文学作品が内包する意味を可能な限り理解しながら膨大な時間をかけて綿密に査読し、場合によっては執筆者に提言を行った。論文の英文シノプシスについては、各論文の執筆者が、各自、‘a native speaker of English’ に英文のチェックをしてもらうことが原則である。

会員による著書をご紹介します。

タイトル：『〈楽園〉の死と再生』
著者：野呂有子　監修
執筆者は総勢 20 名（その内、サイコアナリティカル英文学会の会員は、次の通りである。（敬称略）野呂有子、亦部美希、桶田由衣、上滝圭介、野村宗央、伊藤佐智子　以上 6 名）
出版社：金星堂
ISBN978-4-7647-1140-2
総ページ数：319 頁
定価：3,000 円＋税

サイコアナリティカル英文学論叢
――英語・英米文学の精神分析学的研究――　（第 35 号）

発　行　者　　サイコアナリティカル英文学会
会長　小園　敏幸
印　刷　所　　㈱啓文社　〒861-3102　熊本県上益城郡嘉島町下六嘉1765
TEL 096（368）8100　　FAX 096（369）2677
発　行　所　　サイコアナリティカル英文学会
〒752-0997　山口県下関市前田2丁目27-43
会　　長　小園　敏幸　TEL 090-8297-0729
事務局長　藤見　直子　TEL 080-3978-1913
E-mail ： psell.1974@gmail.com
ホームページ：psell.sakura.ne.jp
郵便局の青色の「払込取扱票」について
口座番号：０１５００－９－２８９４９
加入者名：サイコアナリティカル英文学会

2015（平成 27）年 3 月 20 日発行